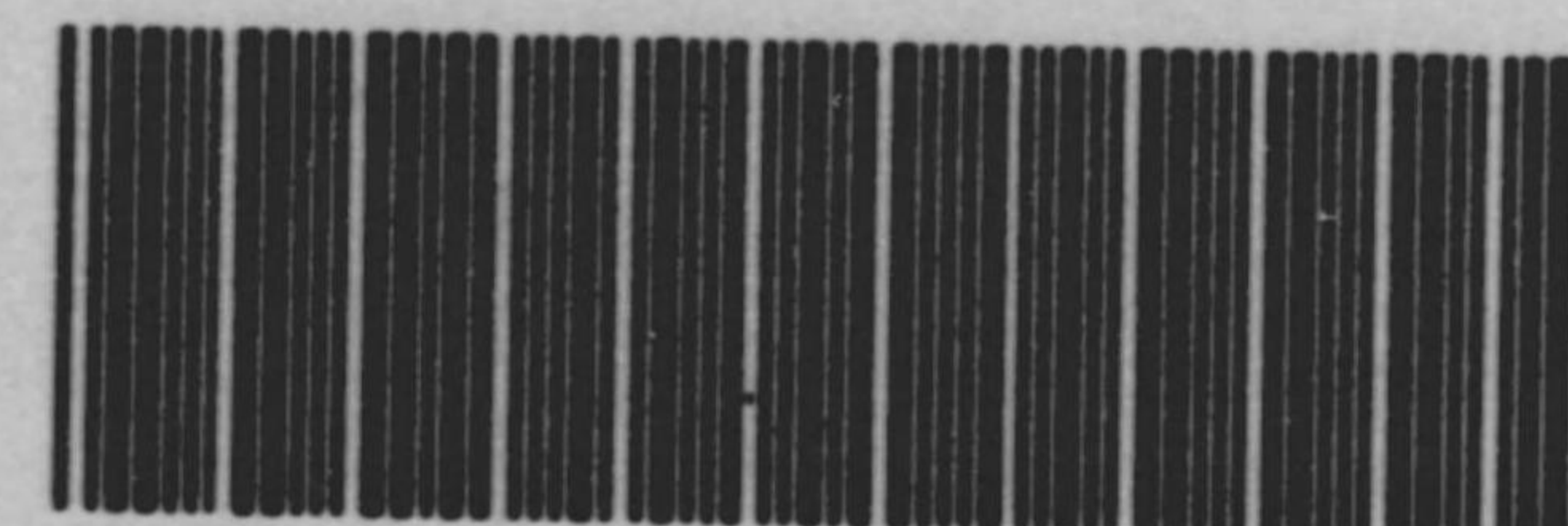


特265  
376



\* 0038262000 \*

0038262-000

特265-376

典型日本女性

社会教育会・編

社会教育会

昭和10

AGG

青年  
叢書

典型日本女性

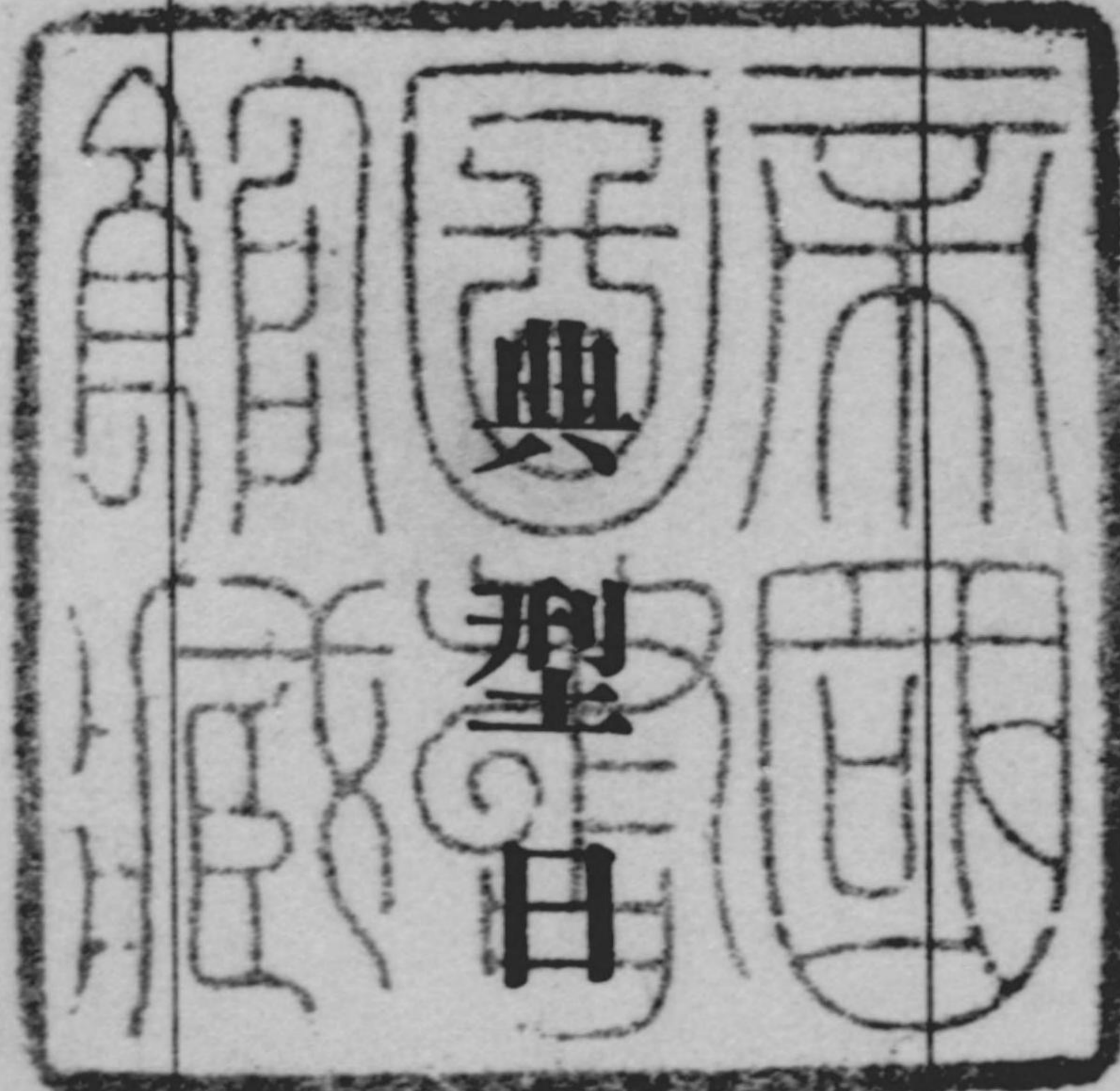
特265

376

347

1001

47265  
376



青年叢書 第十輯

日本女性

財團法人  
社會教育會編

社會教育會  
寄贈本



## 序

現今の青年はよく本を読む、手當り次第に読み去り読み來つて、さて何を  
得たか。

趣味や娯樂の書はやゝもすれば低級に墮し、又多くの修養書や學術書は  
餘りに型にはまり、その讀後、青年の心境に何を印し何を跡づけられる  
か、社會教育上検討を要しはしないか。

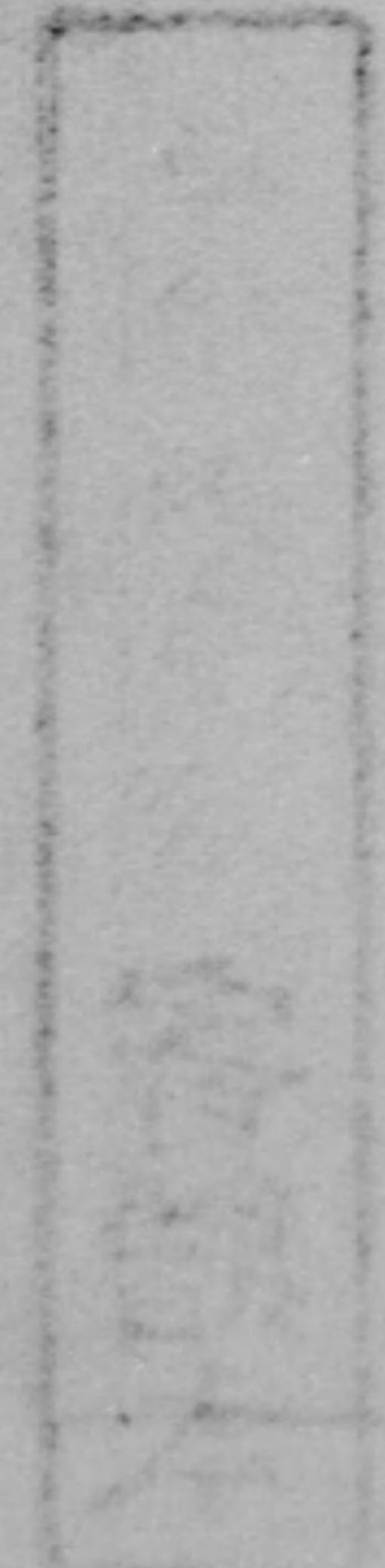
書は靜かに自己の人生的自覺に立つて讀むべきものである。讀んで心の  
糧となし、自己を完成し、自己を培はなければならぬ。

かういふ心構から青年叢書を編して希望に燃ゆる青年諸君の心をひいて  
見る。

東京日本書局



本  
文  
書



## 「典型日本女性」のねらひ所

日本は世界屈指の離婚國である。離婚に幸福の伴ふことはまづ少く、若き人々は概ね之に傷いて、家庭悲劇の素因となることが多い。而して青年諸君が、女性の人格を重んじ、婦人の根本使命を理解することに依つて、之を緩和し得可きのみならず、進んで幸福なる家庭を建設して、國運の進展に貢献し得るのである。

我國に於て、如何に女性の人格を重んずべきか、如何に婦人の根本使命を認むべきか、それは日本女性の美質の正しき認識の把握によつて、之を明にすることが出来る。

「典型日本女性」は、この視点から、特に青年諸君に此の種の參考資料を提供したものである。勿論一般女性もまたこれによつて、自己反省上得る所必ず多かるべしと思ふ。

## 典型日本女性 目次

### 緒 論

- 一、國運發展の基礎は一家の和合協力……………一
- 二、日本は世界屈指の離婚國……………二
- 三、離婚に關する立法例……………三
- 四、日本女性美質の認識……………五

### 大 葉 子

- 一、滿洲建國懷古……………七
- 二、愛國の烈女大葉子……………三

### 和 氣 廣 蟲

- 一、國體擁護……………一七
- 二、兒童保護……………二七

三、護王神社に合祀……………二八

四、寶祚無窮の歌と護王神社の神靈……………二九

小野 小町

一、平安時代才媛頻出……………三四

二、小野小町は如何なる婦人か……………三五

三、小町と現代婦人問題……………五五

清少納言と紫式部

一、共に時代の産める寵兒……………六四

二、清少納言の男性観……………六五

三、紫式部の女性観……………六九

四、兩女の貞操問題……………七九

巴御前と伊賀局

一、平安女性と武家時代の女性……………八六

二、女丈夫の雙璧巴と伊賀……………八六

三、此の兄にして此の妹あり、此の父にして此の女あり……………九三

四、昭和の巴御前昭和の伊賀局……………九五

楠久子と松下禪尼

一、共に意志的女性の賢母……………一〇四

二、北條氏の善政と松下禪尼……………一〇五

三、禪尼の具體的家庭訓……………一一九

四、大楠公の誠忠と夫人久子……………一二九

五、小楠公の誠忠と母堂久子……………一三五

乳母春日局と乳人淺岡

一、乳母によりて婦道の躍進……………一四八

二、家光擁護の乳母春日局……………一四九

三、綱村擁護の乳人淺岡……………一五八

加賀の千代女

- 一、庶民階級の生める才女……………一七三
- 二、恵まれたる彼女の環境……………一七七
- 三、蕉翁の風韻に通ふ彼女の名句……………一八三
- 四、眞俗二諦の彼女の信仰……………一八六

望東尼と蓮月尼

- 一、明治維新と女流勤王家……………一八九
- 二、孝婦誠女と慈母もと女……………一九三
- 三、兩烈女の勤王愛國……………一九九
- 四、歌人蓮月尼と歌人望東尼……………二〇一
- 五、興趣教訓二重奏の逸話……………二〇六

乃木静子夫人

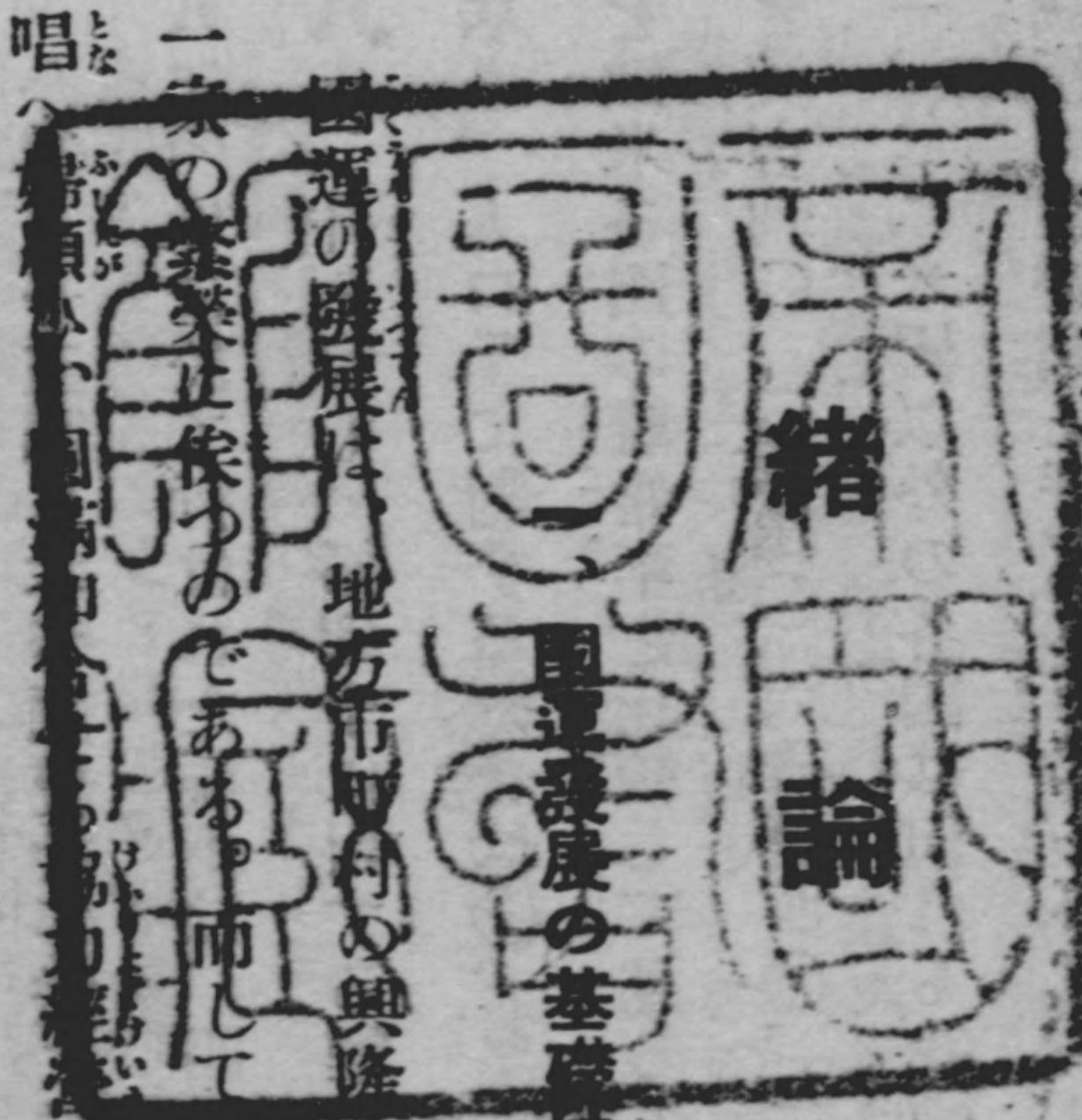
- 一、徳川時代の女性と明治時代の女性……………二二三
- 二、乃木夫人の新婚時代……………二三八
- 三、良妻賢母の典型……………二三四

- 四、三典の詩話と後三典歌……………二四三

結 論

- 一、女子教育の躍進……………二四九
- 二、時運と共に進む堅實味……………二五一
- 三、婦人の天職自覚……………二五三
- 四、昭和女性の姿と活模範……………二五三
- 五、家庭悲劇を絶無せしめて家門の繁榮・地方の興隆・  
國運の進展に貢献せよ……………二五三

# 典型日本女性



一家の和合協力

國運の發展は、地方市町村の興隆に依り、地方の興隆は、其の構成分子たる一家の繁榮に依つのである。而して、一家の繁榮は、我が國古來の美風たる夫唱婦隨の力に由るのであつて、この夫婦親子を中心とする和樂せる家庭こそ、地上の天國であると同時に、國運進展の基礎である。然るにその夫婦關係が、果してどこの家庭でもウマク參つて居るだらうか。犬も喰はぬといふ夫婦喧嘩が嵩じて、遂に婚姻解消にまで進むものが年に幾萬



といふ驚く可き數に上つて居るのである。

## 二、日本は世界屈指の離婚國

今第五十三回日本帝國統計年鑑に就いて、内閣統計局の調査を見るに、昭和八年内地に於て行はれた婚姻は、四十八萬六千五十八件で離婚は四萬九千二百八十二件を算し、婚姻千に對する離婚割合は一〇一で前年に比し一を増加して居り、人口千に對する割合は〇、七三で前年に比し〇、〇五を減少して居る。之を歐米各國の離婚率と比較して見ると、昭和六年に於ける統計は、人口千につき英吉利〇、一獨逸〇、六佛蘭西〇、五丁抹〇、七和蘭〇、四白耳義〇、三米國一、六で、米國以外の各國は何れも我國より低率である。この處から我國は世界屈指の離婚國と呼ばれて居るが、これは決して名譽でないと共に家庭の幸福、國運の進展にどの位妨げとなつて居るか分らないのであつて、事情の許す限り

その率の減少に努めねばならない。尤も我國の離婚は嘗て實數に於て十萬件以上、割合に於て人口千につき二乃至三の高率を示して居つたが、其の後逐次減少して明治二十三年には一、五大正六年には一、〇大正十年には〇、九となつて、昭和八年には〇、七三に減少したのである。

## 三、離婚に関する立法例

外國では法律で離婚をなし得る場合を限定して、而も裁判上の手續を経てのみこれを許さうとする立法例が大部分であるが、又當事者の意志を尊重して、當事者が欲するならば、いつでも離婚出来るといふ自由な立場をとつてゐる立法例もある。我國では、民法にて法律に定めてある原因があれば夫婦の一方からの訴によつて裁判所の手を借りて離婚をなし得る所謂「裁判上の離婚」を認むると共に、夫婦の合意さへあれば原因の如何を問はないで自由に離婚をなし

得る所謂「協議上の離婚」を認めて居る。この協議上の離婚には、妻の意志は全く顧みられないで夫や舅姑の我儘が通つてゐる場合が非常に多く、離婚後の妻の生活の保障とか、夫婦の間に出来た子供の將來とかいふ様なことが考へられてゐないのが普通であるから、家庭的にも社會的にも悲劇を生ずる源となるのが多いのである。かくの如き現状であるから、この離婚問題は男子たるもの夫たるものの猛省を要する餘地が甚だ多いと云はねばならない。

我が國の古へにては、既に大寶令に七出三不出の制度があつた。七出とは子なきもの（女子ありとも不可）不倫なるもの、舅姑によく仕へざるもの、口喧しきもの、窃盜をなせるもの、嫉妬の心強きもの、癩病あるもの、何れかの一に適合すれば離縁さるゝを認めたのであつて、三不出は、舅姑の喪を扶けたもの、娶る時賤しくて後に官位の上つた時、妻の里方のなくなつた時の何れかの一に適合する場合には、七出の理由があつても離婚を認めなかつたのである。

武家時代となつては、持參金諸道具を返還すれば、去狀（三下り半）一本で離婚し得る自由な棄妻主義が認められて居て、我が民法制定以前までは之が一般の風習として男性横暴の天地であつた。

#### 四、日本女性の美質の認識

輓近離婚率の漸減の趨勢であることは喜ぶ可き現象であつて、これは社會の發達、教育の進歩、男女青年團婦人會の活動等が、直接間接の原因をなして居るのであるが、しかもなほ世界屈指の離婚國といはれて、一家の繁榮も地方の興隆も國運の進展も、爲めに尠なからぬ障害を蒙つて居ることは憂國慨世の士の無關心たる能はざる所である。而して本問題の好轉は、もとより社會が女性の地位に對する正しき認識、女性の覺醒等にまつ可きもの多くあるも、男性特に青年諸君が、女性の天職、我國女性の美質等を理解し、やゝもすれば男性横

暴の弊に陥らんことを自ら誠むる事によつて大なる收獲を期待し得可きを信ずる。

こゝに上代より現代に至るまでの日本女性の代表者につき、之を正確なる史實に原據して、その物語りを青年諸君に提供するも、その趣旨實に茲に存するのである。

## 大葉子

### 一、滿洲建國と懷古

滿洲の建國後すでに四ヶ年、その王道樂土の實漸次整ひ行くを見るもの、その、建國物語中に壯烈爆彈三勇士や、遠く日露戦争の當時に遡りて志士横川、沖の諸氏を逸しないであらう。

#### 1、爆彈三勇士

廟行鎮の鐵條網爆破のために昭和七年二月二十二日、決死隊正員五班十五人豫備員二班六人選定されたが、正員の五班十五人は、鐵條網に達せざる中に敵彈のために壯烈の戦死を遂げたので、最後の豫備班六人に更らに任務遂行の命令が下つた。江下、北川、作江の三君は實にその豫備員の一班であつた。この

二班六人共に、強き責任感と愛國の熱情から、悲壯の決心をして身長に近き長さ  
さに積み重ねたる爆弾に点火したるを抱きて鐵條網に突進したのであつたが、  
他の三勇士は武運に恵まれ、爆弾の爆破せざる中に後退して使命を果し且生命  
に別條はなかつたが、江下、北川、作江の三勇士は、途中倒れて復た跳ね起き  
鐵條網に達して爆弾挿入の一刹那、点火し來れる爆弾の轟然爆破して使命を果  
したると共に、肉は飛び散り、骨は碎け壯烈無比の戦死を遂げたのである。干  
時同日午前五時。此の三勇士の母達が上京の時、昭和七年三月十五日筆者は虎  
の門ホテルに之を慰問し、翌十六日退京の際も東京驛に見送つたが、この忠烈  
無雙の偉勳の背後に尊き女性の力、涙ぐましき母性の力の存在を痛感せざるを  
得なかつた。

轟然起る爆音に

やがて開ける突撃路

今我が隊は荒海の

潮の如くに躍り入る

ああ江南の梅ならで

裂けて散る身を花と成し

仁義の軍に捧げたる

國の精華の三勇士

忠魂清き香を傳へ

永く天下を勵ましむ

壯烈無比の三勇士

光る名譽の三勇士

は東日、大毎兩新聞社の懸賞募集一等當選與謝野寛氏作「爆弾三勇士の歌」  
の一節であつて

爆藥筒荷ひて死地に

躍進す、敵營近し

轟然と大地はゆらく

あゝ勇猛、肉弾三勇士

突撃路今こそ開け

日章旗、喊聲あがる

煙幕の消え去る上に

あゝ軍神、肉弾三勇士

は、東朝、大朝兩新聞社懸賞募集一等當選中野力氏作「肉弾三勇士の歌」の一  
節である。友人成田松坡君も當時

爆彈一聲山岳震。皇軍忽破廟行鎮

碎身粉骨答君恩。烈士心肝磨不磷

の詩を賦して、之を筆者に示した事がある。

2、志士横川省三、沖禎介

横川省三、沖禎介の兩志士は、永く滿蒙支鮮に活躍する所があり、偶々明治三十七、八年戰役起るや、青木大佐の指揮の下に決死隊四十七士の列に加はり軍事上の重要任務を帯びて明治三十七年二月北京を發し蒙古に入り、東して齊々ハル附近稚兒河の鐵橋を破壊せんとして露軍に捕へられ、同年四月二十一日午後五時、ハル濱郊外に於て銃殺せられたのであつたが、その捕へられて露國の軍法會議に附せられた際も飽くまで日本男兒の光榮を保持し、固き信仰の下に敵の法官をして襟を正さしむる立派の態度であつて、所持金一千圓を露國の赤十字社に寄附し軍法會議の裁判長たりしダウンタン大佐が、「貴君方は定めて郷

里に遺族があらう其の遺族に送らるゝがよからう、私は責任を以て送り届けて上げませう」と頗る叮嚀に申すと、兩志士は「我らの天皇陛下は決して我らの遺族を御見捨になりません、何卒御納めを願ひます」と強ひて寄附の手續を了し、始め絞殺の宣告あつたものを軍人の名譽面目にかけて銃殺に變更を請ひ、さていよ／＼刑場に出立に先だちて求めて清き水にて全身をきれひに拭ひ清め、横川氏は露軍從軍牧師に馬太傳第五章を讀まんことを要求し、自らも日本語で日文を讀み祈禱し、沖氏も深く感激してさて刑場着後は二本の新しい白木の柱の前に夫々立ちて直立不動のまま、いと敬虔の態度で遙に東の空をふし拜み前方に整列した二十四人の射手が「狙へツ」の一瞬突如二人は兩手を高く上げ

天皇陛下萬歲

皇后陛下萬歲

その聲の終らぬ中に「射てツ」……かくてハル濱郊外大和櫻の花の散つた事

は今も、我國民の感激を新たにして居る處である。

殉教精神殉國人 始終取義又成仁

白衣着得淨干雪 默示聲通率士濱

は、井上和泉氏の志士横川省三追悼の詩であつて、

五尺丈夫唯一誠 赤心如鐵劍悲鳴

神州那箇眞男子 死在沙場骨亦清

は、村尾要三氏の志士沖禎介哀悼の詩であるが、大正十三年今上陛下御大婚の御儀の際長くも兩志士に従五位を追贈し給うたのである。

## 二、愛國の烈婦大葉子

滿洲建國物語りに爆彈三勇士や、横川、沖兩志士を憶ふの人は、朝鮮三千萬の同胞が、王化に霑ひて多幸なる生活を今日營んで居るを見るにつけ、明治大

帝の御稜威を仰ぎ奉り日清日露の兩役に於る幾多の忠烈義勇の美談を偲ぶと共に思ひを一千數百年の昔に致して第二十九代欽明天皇の御代に朝鮮問題に關聯して愛國の烈婦大葉子のあつた事を思ひ浮ぶであらう。

### 1、任那日本府

彼女は調伊企儼の妻女である。古代に於ては、朝鮮の南部に辰韓、馬韓、弁韓の三韓があつて、後辰韓は新羅に馬韓が百濟となつたとき、弁韓は、大加羅又伽耶と言つて常に新羅の壓迫を受くる所から、崇神天皇の六十五年に使を遣して我國に保護を求め、その國名も崇神天皇の御諱御間城から彌麻那と命名され之が後に任那と書き代へられ、今日の慶尙南道金海にあつたのであるが、我國から鹽乘津彦命を宰としてその地に駐在させる事となり、任那日本府が當時設置されて居つたのである。

### 2、頒布ふらすも大和へ向きて

さて欽明天皇の朝に及んで、隣國の新羅が遂に任那を滅したので、朝廷では紀男麿を大將軍として問罪の師を起され、伊企儼は之に副將の重任を帯びて軍に赴き、妻大葉子は、其の子舅子と共にその陣中に在つたが、この戦ひは武運我に拙くあつて、伊企儼も、その妻子も、他の將卒と共に捕虜となつたのである。敵將は刀を抜いて伊企儼を脅し尻をまくつて日本に向ひ「日本の將我が臆睨を醫へ」と言ふなら生命丈けは助けてやらう」と言ふと、伊企儼は早速尻を敵の大將の方に向け、「新羅王我が臆睨を醫へ」と呼び遂に殺され其の子舅子も父の屍を抱いて死んだ。

大葉子は、今日の前に之を目撃して、悲憤やる方なく、元來美しくあつたところから、敵將は大葉子だけは助けて己が意に従はせんと種々の甘言を以て之を誘惑したけれども、彼女は凛として之を卻け、

韓國の城の邊に立ちて大葉子は頌布ふらすも大和へ向きて

の悲痛なる歌を詠んで自ら敵の刃にかゝつて、從客としてその夫その子に殉じて死に就いたのである。頌布は、古昔婦人の頸に掛けて飾りとしたもので、頌布振は古昔、女の人を招き、又別れを惜みなどするさまにいふのであつて、萬葉集五にも

遠つひと松浦佐用姫つまごひに比例布利しよりおへる山の名

など見えて居る。大葉子の歌の大意は、韓國にまで子供と共に夫に従つて遠征して來たが、今其の夫も子供も死んで仕舞つた、自分も敵の甘言に従はずに祖國日本に向つて最後の別れに頌布を振つて潔く死に就いて日本婦人の名譽、日本武人の妻女の面目を全うするとの意であつて、其の貞烈その愛國的至情は、眞に鬼神をも泣かしむるの慨がある。爆彈三勇士や横川、沖の兩志士の忠烈は昭和、明治の御代に於る美談であるが、一千數百年の往昔に於て、一女性の身を以て遠く異域に香ばしく散つた大和撫子の大葉子に日本女性の美質を何人も

認めざるを得ないであらう

○詠史（大葉子）

鮮満の御民幸あり頒布ふりし昔の人の魂もほゝるむ

## 和氣廣蟲

### 一、國體擁護

1、第六十七帝國議會に於ける國體明徴問題と

岡田内閣の善處

第六十七帝國議會に於て、國體明徴の問題が大問題となつて、三十年來東京帝國大學で講ぜられて來た美濃部法學博士の天皇機關説を否定して政府にその善處を迫る所あつた。岡田内閣は慎重にその對策を研究して、内務大臣は美濃部氏の該關係圖書の發賣を禁止し、文部大臣は國體明徴の訓令を公布し、内閣總理大臣は昭和十年八月三日に

恭しく惟みるに、我が國體は天孫降臨の際下し賜へる御神勅に依り明示せらるゝ所にして、萬世一系の天皇國を統治し給ひ、寶祚の隆は天地と與に窮な



しされば憲法發布の御上諭に「國家統治ノ大權ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ」と宣ひ、憲法第一條には、「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と明示し給ふ。即ち大日本帝國統治の大權は儼として天皇に存すること明なり。若し夫れ統治權が天皇に存せずして天皇は之を行使する爲の機關なりと爲すが如きは、是れ全く萬邦無比なる我が國體の本義を愆るものなり

近時憲法學說を繞り、國體の本義に關聯して兎角の論議を見るに至れるは寔に遺憾に堪へず。政府は愈々國體の明徴に力を效し、其の精華を發揚せんことを期す。乃ち茲に意の在る所を述べて、廣く各方面の協力を希望す。

との聲明書を公表したが、陸海兩相の強硬なる主張もあつて、昭和十年十月十五日に更らに

曩に政府は國體の本義に關し、所信を披瀝し以て國民の嚮ふ所を明にし、愈

々其精華を發揚せんことを期せり。

抑々我國に於ける統治權の主體が天皇にましますことは、我國體の本義にし、帝國臣民の絶對不動の信念なり。帝國憲法の上諭並に條章の精神亦茲に存するものと拜察す。然るに漫りに外國の事例學說を援いて我國體に擬し、統治權の主體は天皇にましますとして國家なりとし、天皇は國家の機關なりとなすが如き所謂天皇機關説は、神聖なる我國體に戻り其本義を愆るの甚しきものにして、嚴に之を艾除せざる可からず。政教其他百般の事項總て萬邦無比なる我國體の本義を基とし、其眞髓を顯揚するを要す。政府は右の信念に基き、茲に重ねて意のあるところを闡明し、以て國體觀念を愈々明徴ならしめ、其實績を收むる爲、全幅の力を效さんことを期す。

なる再聲明をなして、苟くも國民をして、國體の本義を愆るなからんを期したのである。

## 2、天壤無窮の神勅

抑も我國體は、この岡田首相の聲明書の如く、天照大神が皇孫瓊々杵尊の此の國土に降臨の際下し賜へる御神勅によつて、萬世一系の天皇統治まします世界無比の有難い國柄であることは炳として日星の如く明なる所である。日本書紀卷二に

天照大神乃賜天津彦彦火瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物、又以中臣上祖天兒屋命・忌部上祖太王命・猿女上祖天細女命・鏡作上祖石凝姥命・玉作上祖玉屋命凡五部神使配侍焉。

因勅皇孫曰、豐葦原千五百秋瑞穗國是吾子孫可王之地也。宣爾皇孫就而治焉、行矣、實祚之隆當與天壤無窮者矣。

とあるのは、それであつて、現代の普通の読み方では「豐葦原の千五百秋之瑞穗國は、是吾が子孫の王たるべき地なり、宜しく爾皇孫就而治めよ、行け矣、

實祚之隆當に天壤と與に無窮なるべし」であるが、古語のままの読み方は「豐葦原之千五百秋之瑞穗國は是れ吾が子孫の王たる可きの地なり宜しく爾皇孫就て治せ、行矣、實祚之隆えまさむこと當に天壤と窮り無かるべし」である。

### 3、御神勅と頼山陽、井上博士、山鹿素行、徳富蘇峯

頼山陽は、此の御神勅に付て、「日本政記」の中に、

「當下與天壤無窮、因共言之驗於後、可以知其德之基於前己」と言つて居るが、井上哲次郎博士は

「建國の起源は非常に遼遠である。其の長い歴史と共に益々國運の發展を來たし居る。その國運の發展を來たし居るのは、即ち此御神勅に見えて居る大理想が次第に實現されて來居るのである。國運の發展と御神勅の中に在る理想とは始終一緒になつて居る。そこが餘程趣味のある處で、さう云ふ特色が日本の國家にある。そこを頼山陽は酷く感じて、政記の中にあゝ云ふ具合に

書いた。また山陽の時には、明治維新と日清戦争と日露戦争を経て居らぬのである。それでも深く國體の玄妙なる處に感じたと見えて、後に驗あるに因つて其徳の前に基くを知る可きのみと言つて居る。頼山陽をして今日に在らしめたならば、是位の感じでは無かつたらう。遙かに強大な感じを起したのであらうと思ふ。」

と論じ、又山鹿素行は此の聖勅について

「謹みて按ずるに、これ天神治道の始めなり。與天壤無窮の五字、寶祚を祝し以て治平の道を盡すなり。夫れ天地は至誠にして息むことなし、悠遠博厚にして、物を覆ひ物を載せ、而してこの無窮を得。君子以て自ら彊め、以て徳を厚うせば、則ち往くとして利ならざるはなし。人君これを體して、四海を御すれば、則ち萬國咸寧し。これ天壤と窮りなき所以なり。」

と言つて居るが、徳富蘇峯翁は、素行の此の言を以て、これは寧ろ人君天職の

上より立言したるものであるとし、

「更に此の意味を入臣、即ち日本國民の上から觀察すれば、天壤無窮の寶祚を翊戴して、萬世不動の皇運の隆昌を力むるは、これ臣道の骨髓であらねばならぬ。即ち此に君は君の天職としての日本精神、臣は臣の本分としての日本精神が認識せらるゝ」

と論じた事があるが、眞に此の聖勅の御趣旨は、古今を通じて歴代明君の奉體し給ふ所であり、又我が國民の信念であつて、こゝに君民同和の輝かしき三千年の國史を産み、帝國憲法第一條となり、又未來永劫に皇運の隆昌大和民族の彌榮を期待せらるゝのである。

#### 4 顯宗天皇繼體天皇の御事

第二十二代清寧天皇皇儲おはしまさざりし時、履仲天皇の御孫弘計王を播磨の國からお迎へ申して第二十三代の顯宗天皇とならせ給ひし如き、又第二十五

代武烈天皇崩御皇嗣なかりし時、男大迹尊を越前からお迎へ申して、第二十六代繼體天皇とならせ給ひし如きは、正史に明かなる所であつて、繼體天皇の如きは、實に應神天皇五世の孫にましまして、御即位の時は御年五十七歳に渡らせ給うたのである。かく非常の場合に際しても、天津日嗣は必ず皇胤を以て嗣がせ給うたのであつて、我が國體の尊嚴は實に茲に存し、皇室中心主義は、實に日本精神の中樞を爲して居るのである。

5 清鷹の誠忠と姉廣蟲

青丹よし尊樂の都のその昔、この尊嚴なる國體が妖僧弓消道鏡のために、一大危機に直面したけれども、忠臣和氣清鷹あつて能く天壤無窮の寶祚を擁護し奉つたのであつたが、その清鷹の精忠の背後には姉廣蟲の力が大なる援助を爲したることを看過してはならない。

道鏡稱徳帝の寵を待んで、密かに宇佐八幡の神官の習宜阿蘇鷹をして「八幡

の教旨に道鏡をして皇位に即かしまれば、即ち天下泰平ならん」と奏上せしめたのであつた。そこで天皇は清鷹をお召しになつて「昨夜の夢に八幡の神使來りて曰く、太神汝の姉法均に憑りて言ふ所あらんと欲す汝宜しく法均に代りて往く可し」と仰せ付けらる。發するに當りて道鏡は「太神我をして位に即かしまんと欲す。使を請ふ所以は蓋し此が爲めならん。汝宇佐に詣りて神教を奉じ、我をして欲する所を得せしめば、則ち汝に太政大臣を授け、委ねるに國政を以てせん。若し我が言に違はゞ即ち重刑に處せん」と清鷹を威嚇したけれども、清鷹の血潮には、我が建國以來の大和民族の美はしき信念が流れて居る。固より深く決する所あつたけれども、唯一つ姉廣蟲に難儀をかけてはとて姉の許に暇乞に参つたとき其の心配の様子が見えたので、廣蟲は、必ず正しき神旨を得て歸る様に激闘したので、清鷹は更らに力を得て死を決して宇佐に到り、みそぎはらひをして全く清淨無我の心境となつて、神教を請うた處「我が國家は開

關以來君臣の分定まれり、臣を以て君と爲す未だ之あらざるなり、天日嗣は必ず皇胤を立て、無道の人は宜しく迅かに掃蕩すべし」との御神託であつたので還りて其の通りに奏上し、道鏡の謀叛は根底から破れて茲に天壤無窮の國體を擁護し奉り、國家を泰山の安きに置く事が出来たのである。干時稱徳天皇神護景雲三年皇紀一千四百二十九年九月。然し果然道鏡は大に怒り直ちに天皇に奏上して清麿の本官を解き、其姉法均と共に神教を矯め朝廷を欺罔すと認いて同年九月二十五日清麿は穢鷹として大隅に、法均は廣蟲賣として備後に流してしまつた。翌千四百三十年八月四日稱徳天皇崩御遊ばされ光仁天皇踐祥し給ふや、同月二十一日道鏡を下野に貶し九月六日には清麿姉弟を召し還へし給うて重く用ゐさせ給うた。この清麿の誠忠は史上にはあまりにも有名の事柄であるが、その弟清麿をして能く其の國民的信念に邁進の様激勵しました姉廣蟲の力こそ、日本女性の忠誠心を物語つて餘りある次第である。

## 二、兒童保護

和氣廣蟲は、備前藤野郡の人、從五位下葛井戸主に嫁し貞順の良妻であつて宮廷に仕へて孝謙天皇に深く愛信せられ、正六位下を授けられる。帝落髮せらるゝや、廣蟲も亦薙髮して法弟子となり、法均尼と呼んだ。

天平寶字八年惠美押勝の亂後、饑饉と疾病の流行より、生活の壓迫に堪へかねて、棄兒が京都に多かつた。哀れにも罪なき幼子供等は此の世からなる地獄に落ちて飢と寒さに唯だ死を待つのみであつた。天性慈悲心に富み、常に功德を普く一切の衆生に施さんといふ佛教の信仰に燃ゆる法均尼は、之を座視するに忍びないで、早速人を遣はして市中を馳せ廻らせ集めた不幸の子供は實に八十三人の多數に達した。之を我が子の如く慈み育てて養子となし、かくて此の運命の子供等も、法均尼の愛情の下に成育して葛木の性を賜はり、おのがじじ國

家と人生とに貢献し、時の人も此の尼の徳行に感じて佛菩薩の再來と禮讃したとの事である。

大正十二年四月一日、我が澤柳文學博士の一行は、伊太利ナポリ市のカチヨラ號の海の學校に、孤兒、貧兒、捨子の救ひの母チヴィタ女史を訪問して、幾百の不幸なる子供を明るく正しく養護教育し、之を實社會に送り居る輝かしき實蹟を感嘆された事があつたが、我が國には一千七百年の昔において、すでにこの兒童保護に成功せる法均尼を出して居りますことは、日本女性の誇りの一と謂ふ可きである。

### 三、護王禪社に合記

國體の危機に直面しては其の弟を勵まして、よく日本精神を發揚せしめ、君側に侍してよく奉仕の大任を果し、博愛仁慈よく孤兒の養護に力を致し、佛に對

して恭敬歸依、夫に事へて溫良貞淑、人に接して親切謙抑であつた法均尼の廣蟲は、桓武天皇延暦十七年正月十九日六十九の高齡を以て歿したが、その翌年の二月二十一日には弟の清麿も六十七を以て薨去した。淳和天皇の天長三年には廣蟲に正三位の御贈位があり、明治十九年十一月三日には和氣清麿を祀れる京都の別格官幣社護王神社に合祀仰せ出され、永く護國の神として崇めらるゝ事となつた。

### 四、寶祚無窮の歌と護王神社の神靈

皇祖天照す日の大神

瓊々杵尊に言依したまはく

「豊葦原千五百秋瑞穂の國は

我が子孫の王たるべき地なり

宜しく爾就きて治らせよ  
實祚の隆えまさんこと  
當に天壤と與に窺みなからん

こゝにもちて

荒ぶる神を神問はしに問はし給ひ

神掃ひに掃ひたまひ

高天原に宮柱太しき立てて

慶びを積み暉を重ね

建國以來百二十三代  
教聖文武の我が天皇

今日を生日の足日とて

高知らせ給ふ高御座

萬方に勅して宣はく

「朕今丕績を續ぎ遺範に遵ひ

内は邦基を固くして

永く磐石の安を圖り

外は國交を敦くして

ともに平和の慶に頼らんとす」

天子大空の位に即かせ給ふ

祝へよや

天に繼ぎて極を建て

乾坤を統ぶるまつりごと

言賀げよ

列邦朝々之を仰ぎ

明德を明らかにし給ふ

慶べよ

鏡の如く明らかなるをもちて照臨し

正しき大道こゝにひらけ

神劍を提げて荒ぶるものを和し

威ある平和こゝに生まれ

八阪瓊のひろがれる如く四方を治らし

新しき文明こゝに成らん

現神わが大君の大御稜威

いやあらたにいや嚴かしく

天地のむた萬千秋の長五百秋に

とこしへかはらぬ御代の榮を

祝へやうたへや常磐堅磐に

君萬歳と祝へや

は、平木白星氏の「寶祚無窮」の名作であつて、現代青年の愛誦する所となつ

て居るが、惟ふに護王神社の神靈も、遠く神護景雲三年の當時を偲ばれ、いかに感慨深く之を聞こし召すであらうか。

○詠史（和氣廣盛）

長しへに我が大君を護ります護王の女神仰がざらめや



# 小野小町

## 一、才媛頻出

我國上代に於ては、男女人格の平等を認め女子は特に和順貞節を美德としたのであつたが、其の後女子と小人とは養ひ難しとする儒教、並びに女子を特に罪業深きものとする佛教の影響に依つて、女子の地位が著しく低くなるを免れ得なかつたのである。

かくて平安朝に到りては、世の太平の永く續きし上に、全國の莊園から集り来る収入で「櫻かざして今日も暮しつ」の有閑階級の藤原氏を中心として、藤岡博士の所謂情念偏重の時代が現出した處から、儒教の道德も、佛教の戒律も顧みられずに、婦女子は、専ら其の美を磨き才藝を練つて、男子に認めらるゝ事に腐心したのであつた。さればこの時代に女流文學者の輩出して、彼の紫式

部や、清少納言、和泉式部、小式部、赤染衛門、伊勢大輔、出羽の辨、馬内侍高内侍、江侍従、新宰相などが和歌に文章に、卓絶の作品を永く後の世に遺して居る。而してこの平安時代の初期に於て、の歌仙の一人として、又美人として名高き小野小町を出して居るが、小町とは果して如何なる婦人であつたのであるか。

## 二、小野小町は如何なる婦人か

### 1、七色小町

「小野小町か楊貴妃か」と古來美人の代表の様に傳へられて居る小野小町は果してどんな婦人であつたのかとの疑問は、何人にも起るのであるが、日本後紀や、續日本後紀、文德實錄、三代實錄などには小町の名が少しも見えて居らない。清少納言の枕草子、赤染衛門の榮華物語、紫式部日記、和泉式部日記の



類にも、小町に關する記事は一つもない。多くの文献には傳記末詳とあるが、古今集目錄には、出羽郡司の娘で比右姫と謂ひ、母は衣通姫などとあるが、郡司の娘を姫と呼ぶはおかしいし、衣通姫は允恭帝の妃にて小町よりも四百年も昔の方である。群書類從卷六十三に所載の小野氏系圖には、小野篁の孫にて良眞の女としてあるが、之も明證がなく、且小町は篁十四歳の時に生れて居るから孫でないことは明かである。其の家集の小野小町集も、本居宣長の玉勝間には、其の杜撰にして小大君の歌の多く混入しあるを論じて居る。

色見えでうつろうものは世の中の人の心の色にぞありける

は、定家卿の百人一首に撰まれて、彼女の歌としてオサゲの小さき嬢さんまでも知つて居る所であるが、其の名歌が古今集に十六首、後選集に四首、新古今集に六首等を始め勅選集に入りしものが多くある。紀貫之はその歌を評して小野小町は古の衣通姫の流なり、あはれなるやうにて強からず、いはばよき女の

なやめるところあるに似たり、強からぬは女の歌なればなるべし」などと古今集の序に言つて居る。かやうにその傳記が詳でないところから後世虚實を交へたる色々の假記傳説が出来て、謡曲に淨瑠璃に傳へらるゝものが甚だ多く、その主なるものに通小町、草紙洗小町、雨乞小町、關寺小町、卒塔婆小町、清水小町、鸚鵡小町の七色小町なるものがある。

一、通小町は、深草の少將善佐が、小町に懸想して百度通はゞ逢はんと小町の戯れに言ひしを實と思ひ、九十九夜まで通ひつめ、今一夜ぞ嬉しやと喜びし甲斐もなく、俄に胸を病みて遂に果なくなりしを作つたのである。

二、草紙洗小町は、内裏の歌合に「水邊草」といふ題にて小町の相手には大作の黒主をつがはれた。黒主は小町の「まかなくに何を種とて浮草の浪のうねくおひ茂るらむ」の歌を窃に知つて、之を自分の持てる萬葉集中に書き入れ置き、小町の歌は己の持てる萬葉集に入り居る古歌なりと誣ひしを、紀貫之の

はからひにて草紙を洗ひ落して、黒主の企みの露見するよしを作つたので、小町と貫之が同席するなど時代合はざる架空物語りである。

三、雨乞小町は、或年早魃に苦しみしより、朝廷にては一首の和歌を手向け、龍神に禱ることとなり、歌人小町に詔りあつて和歌を詠せしめられたるに、小町は「ことはりや日の本ならば照りもせめさりとてはまたあめのしたとは」と詠みて短冊に認め池水に浮べたるに、不思議や大雨忽ち降り出で、その大雨三日三夜に及び、國土潤ひ上御一人より下萬民に至るまで歡ぶ事限りなく、小町が徳大に顯はれたるよしを作つて居るが、此の歌は、雄長老の狂歌百首附録によれば、慶長頃の狂歌であつて、史實上の小町雨乞の歌は、別に述べます様に「千早振る神も見まさば立ち騒ぎあまのとははの樋口あけたまへ」である。

四、關寺小町は、小町關寺のほとりに、はにふの小屋をしつらひて住みけるを、小町とは知る人もなかつた、或時關寺の住僧兒を伴ひてその老女を訪ね、

「我がせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも」の歌を尋ねたところ「それは衣通姫の歌なり我らもその流なり」と云ふので、僧は、小野小町こそ衣通姫の流と聞いて居るより不審に思つて「詫びぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」といふ歌を尋ねた處、それは文屋康秀の我を誘ひし事のありし程に、詠みし歌なりと答へたので、僧はさては小町にてましますかと、驚き侍るよしを作つたのである。

五、卒塔婆小町は、小町は百年の姫となつて、道行人に物を乞ふ哀なさまとなり或時大きな卒塔婆の朽倒れたのに腰を掛けて休らひ居たる折ふし、高野山の僧が通り合せて之を見て、「佛體を刻める卒塔婆を汚してはならぬ、こつがいよ、他の所にて休めよ」と申すと、そとばの起り功德から、草木國土悉皆成佛の道理をそのこつがひは説くので、僧は驚いて三拜の上、いかなる人の成れの果てかと尋ねると、恥しや我は小野小町のなれのはてにてさふらふなりと言つ

て「極樂の内ならばこそあしからめそとはなにかは苦しかるべき」の戯の歌を詠んだよしを作つて居る。

六、清水小町は、小野小町死後間もなく陸奥衣が關の上人、諸國行脚の途次都清水寺に詣で、音羽の瀧にいたりて、小野小町が「何をして身のいたづらに老いにけむ瀧のけしきはかはらぬものを」の歌を思ひ出で、涙を備したるに、不思議や一人の女あらはれて「やさしき旅の御僧やな、その歌を承れば、妾も哀にさふらふなり、市野原には小町の塚の候なり、あはれ願くはかしこに御越しあつて、跡をば訪ひ給へかし」と、市野原の小町の塚に案内して、かき消す如くその女が失せた處から、その僧が夜もすがら續經して、さてその夜の夢に、小野小町四位の少將と共に、佛果を得て兜卒天に飛去りしを見たよしを作つて居る。

七、鸚鵡小町は、陽成院の帝、敷島の道を好ませ給ひ、百とせの姫となりて

關寺のほとりに住める小野小町の名譽のうたよみなれば、世にすぐれし歌もあらむと思召され、新大納言行家卿を勅使として「雲の上はありし昔にかはらねど見し玉だれの内やゆかしき」の御製を賜はり、その返歌によりては重ねて題を下し給ふとの事で、行家小町に尋ねあひて此の御製を傳へたるに、小町はいとあり難く御請をいたし、扱此の返し畏多ければ一字をもて御返し仕らんとて「雲の上はありし昔にかはらねど見し玉だれの内ぞゆかしき」と申して、これは鸚鵡返しなる由を勅使に説明するよしを作つて居る。

2、「あなめあなめ」と玉造小町壯衰書

以上はその七色小町の梗概であるが、なほ小町の傳説として有名なるものは「あな目あな目」と「玉造小町子壯衰書」である。

あな目あな目は、大江匡房の江家次第に始めて顯れてから、鴨長明の無名抄等にも、類似の事績を誠しやかに報ぜられて居る。大意は、業平朝臣が東下り

して陸奥の八十島で小野小町の屍を捜した。その夜その處に宿つた處、野中に歌の上の句を詠する聲がした。「秋風の吹くにつけてあな目あな目」といふ。あな目はあやにくといふことである。不思議に思つて聲を尋ねて求めたが人はゐず、翌朝見ると鬮骸の目の穴から野蕨が一本生えてゐた。土地の人にきいたら小野小町がこの國に下つて、ここで歿したといふ。そこで業平は哀れに思ひ涙と共に下の句「小野とは言はず薄生ひたり」を付けて、其の鬮骸を斂め葬つたといふのである。而して業平の東下りは、天安二年(紀元一五一八年)であつて、當時小町は四十四歳で尙ほ生存して居つて、業平にも分つて居つたのであるから、業平がその屍を求むるといふ筈もなく、又鬮骸の中に野蕨が生えてゐるとあるに、歌には薄生ひけりとあるも條理が合はない。これは多分匡房の筆でなくて、後人が江家次第に加筆したのであらう。

玉道小町壯衰書は、世の女子の容色を恃むもの、鑑戒の趣旨にて、玉造小町

の一生の盛衰を白樂天の秦中吟の體に倣うて、長篇百二十四韻に賦したもので群書類從文筆部に收めてある。空海撰としてあるけれども弘法大師の作とは思はれない。篇中の玉造小町はもとより假托の人物で、小野小町には何の關係もないのであるが、十訓抄及著聞集にこれを小野小町の事として載せた處から、後世種々の説を爲す様になつたのである。

### 3 小野宰相藤原常嗣の女

かくの如く異説が多くて其の素性を詳かにすること容易でない小野小町は、出羽の郡司の娘で姉と共に采女として宮仕へしたものだなどの説もある。采女は頒布を項に懸けて陪膳に奉仕する義で、各地からその土地で最も美しい乙女を朝廷に出し、齡は十三歳以上三十歳以下、或時は十六歳以上となつて姉妹があれば二人ともに採用せられて居た。今日でも京美人といふのは、この采女から傳つて居るともいふのである。さて小町は出羽の國から選まれて采女となつ

たといふも、その郡司の娘といふことが事實でないとなればこれも問題にはならない。その采女説は出羽の郡司の女と傳へられたるに秋田美人を結びつけた作爲であらう。然れば小野小町の眞相は結局不明かといふと最近に至つて、關谷眞可彌氏が、其の名著「小野小町秘考」中にさきに佐竹侯爵家に秘藏せられてあつた書は藤原信實、略傳及和歌は後京極攝政良經の筆になる三十六歌仙繪卷等によつて藤原鎌足七世の孫參議左大辨遣唐使小野宰相藤原常嗣の女比古姫で嵯峨天皇弘仁五年（一四七四年）に生れ、母は左大臣藤原緒嗣の女。小野は父の小野宰相と呼ばれし家號であつて、小町は宮中の呼名なる由を公にして居る。小町はこの名門の出であつたればこそ、其の才色と相俟つて深草の親王の御寵を辱うしたが、後藤原冬嗣・長良・良房等が、冬嗣の女にして長良・良房の妹である順子の方を深草の帝の皇后に入れ申した事情等から、卻けられて比叡の麓小野の莊にて不遇に終りながらも、初戀の君を慕うて固く節操を持し、他日

の光榮に輝く喜びを期待して居つたことが領けるのであつて、こゝに多年の疑問も、稍曙光を認むるに至つたのである。

小町に關する文献が乏しい處から、其の一生を窺ふには、其の遺れる和歌に俟たねばならない。黒岩涙香氏は先年この視點から「小野小町論」なる著作を公にしたことがあるが、小町の詠みし和歌の贈答等によつて、彼女は小野貞樹、安倍清行、文屋康秀、僧正遍昭、在原業平などと交際のあつたことがわかる。

#### 4 小町と安倍清行

古今集の中に「下つ出雲寺に人のわざしけるに眞靜法師の導師にて侍りけるに、言ひける言葉を歌によみて小野小町が許に遣しける」の詞書の下に安倍清行が

つゝめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけり

の歌と並べて、小町のかへし

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへず瀧津瀬なれば

の歌が載つて居る。これは、京都の下出雲寺で、或人の追善の法事のあつたとき、眞靜法師が導師として、法華經の中にある、困窮の人の衣服の裏に寶珠を繋ぎ與へたが、その者が之を寶と知らざる愚さよの談義をしたが、この小町も清行も共に聽聞して居つたので、清行は法華經の衣裏寶珠の事がありがたくて袖に包めども溢れ出る涙の白玉は、日頃戀しく思つてゐる人に逢ふ事の出來ない目から溢れ出る涙であると申し贈つたのに對して小町は、私が戀しき人のために流す涙は、そんな袖に包みきれぬ白玉位の事ではない。いかに堰き止めてもせきとめ切れぬ程流れ出る瀧の水の様に激しいと申して、小町よりも十も年下の若き文章生安倍清行の求愛を峻拒したのである。

5 小町と在原業平

伊勢物語で有名の在原業平は、平城天皇の皇子阿保親王の第五子で、天長二

年に生る。母は桓武天皇の皇女伊登内親王。父親王の奏請によつて、在原朝臣の性を賜つて臣籍に列せられ、元慶元年に右近衛權中將に任ぜられたので、阿保親王の第五子で在原朝臣なるが故に、世に在五中將と呼んだのである。彼の伊勢物語中の母の方が長岡(山城國乙訓郡)に住み給ひて

老いぬればさらぬ別のありといへばいよいよ見まくほしき君かな

との歌を京に宮仕への業平の許に遣はされけるとき

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もといのる人の子のため

と詠みて、急ぎ母の許に駆け付けたといふ孝行話の主人公であるが、又婦人關係で多くの噂を作つた人でもある。さらぬとは不避にてさりのがるゝ事のならぬ死別のあるをいつたのである。さてこの業平は、小町の許へ

秋の野に笹分けし朝の袖よりも逢はでぬる夜ぞ濡まさりける

と申贈ると、小町は

みるめなき我が身を浦と知らねばやかれなで海人の足たゆく来る

とかへして居る。秋の野に笹分けて露に濡る袖よりも、逢はで寝る夜の涙流れ  
て一層多く袖がぬるゝと業平がいへば、小町は海松布なき浦にかけて見る目な  
き我が身を憂しと思ふ意を添へて徒にその海松布を苴らむとて足のつかれる程  
來ても無駄ですよと翻弄したのである。

6 小町と僧正遍昭

遍昭はもと良峯宗貞と稱し、桓武天皇の皇子大納言右大將正三位良峯朝臣安  
世の子で、嵯峨天皇の弘仁七年に生れて居る。仁明天皇の寵眷を得て、天皇崩  
御あらせらるゝや、哀慕の餘り藏人頭の榮冠を棄て、自ら佛門に歸依し、叡山  
に登り名を遍昭と改め、臺教を慈惠僧正圓仁に學んで居る。この遍昭と小町と  
の間に石上問答といふ有名なるユーモアの挿話がある。後撰集雜三に載せられ  
てある次ぎの贈答歌はそれである。

いそのかみと家寺にまうでて日のくれにければ夜あけてまかり歸らむとてと

どまりて此寺に遍昭侍ると人の告げ侍りければ物いひ心みにいひやる

小野 小町

いはの上に旅寝をすればいと寒し苔の衣を我にかさなむ

返 し

遍 昭

世をそむく苔の衣はたゞひとへ貸さねばうとしいざ二人寝む

この寺は大和國山邊部石上布留村にある良因寺で、一名石上寺ともいふ。い  
そのかみは石上と書くから、その石の上に旅寝して通夜をする事は、寒くて堪  
へ難いから、御身の僧衣でも貸して貰ひたいと小町が言ひやれば、遍昭は、世  
をそむく苔の衣はたゞひとへのみしかないから貸されない。しかし折角の申出  
でを貸さないといへば不深切の様であるから、いつそのことこの一枚の衣を二  
人兼用としようではないかと、小町の諧謔に報ゆるに、遍昭の諧謔を以てした



のである。悲戀に泣く小町に、このユーモアの一面もあつた様である。

#### 7 小町と小野貞樹

小野貞樹は、天武天皇六世の孫石見王の子であつて、小野朝臣の姓を賜はり仁明天皇の嘉祥一年には、春宮少進となり、後刑部少輔に進み、又甲斐守ともなり、肥後守にも任ぜられて居る。小野小町家集には「わすれぬるなめりと見えし人に」と端書して小町から

今はとて我が身しぐれとふりぬれば言の葉さへにうつろひにけりと貞樹に申し送ると、貞樹のかへしは

人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまにまに散りもまがはめ

と載せてある。この贈答は、いつ頃であつたかは不明であるが、貞樹が甲斐守の任に赴いた仁壽三年の前頃とすれば小町が宮中をまかりて里に住み居つた四十頃、貞樹は二十五、六歳であつて、戀愛關係ではなく、遍昭との贈答と同

性質の諧謔的のものとするべきであらう。

#### 8 小町と文屋康秀

百人一首の「白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける」の作者文屋康秀は、縫殿助文屋宗子の子であつて、在五中將や良峯宗貞等に比すれば、その身分は實に雲泥の差であつて、清和天皇貞觀二年には、刑部中判事となり、同十五年には、三河椽となり、後相模椽又山城大椽となり縫殿助ともなつて、小町とは略ぼ同年齢の人である。

#### 彼の小町の

ともすれば仇なる風にさど波のなびくてふごと我なびけとやは、康秀の誘惑を斥けしものであり、又玉葉集にある。

結びきといひける物を結び松いかでか君に解けて見ゆべき

も、康秀に「私は或るやむごとなき御方と堅い契が結ばれてあるから何と言は

れてもあなたの言葉に従ひ打解けてお逢する事が出来やう筈がない」旨を詠んで興へたものである。これは小町の全盛時代の頃であつたが、晩年六十前後となつた頃、康秀が三河椽として赴任するとき、あがた見即ち田舎見物に小町を誘ふた處、小町は、

わびぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ  
と詠んで應答して居るが、「いなむとぞ思ふ」は、直に康秀に従つて行きませうといふのではない。誘うてくれる人があらば、住つて見やうと思つて居ると戯に答へたので、關谷氏も「若いときしたゝかいぢめた事もある康秀如きに、従つて行くべき小町ではないやうに思はれる」と「小野小町秘考」に論じて居るが、筆者も感を同うするものである。

### 9 小町の貞操

以上の叙述によつて、謎の人小野小町の全貌を略ぼ明かにし得たと思ふが、

藤原冬嗣父子等の政略の犠牲となつて、天晴れ天の成せる麗質も、遂に玉の輿に乗る機會を得ずして、空しく悲戀に泣ける一生であつたことは、何人も同情を禁じ得ぬ所である。彼女が、あるやんごとなき御方の有り難き御寵愛を蒙りて、わが一生をさゝぐ可き人は此君と深く決心して後は、あらゆる大官人の求愛を斥け、その宮仕へを辭せしめられて小野の莊に佗住居の身となつても

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを  
うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふものをたのみそめてき  
いとせめて戀しき時はうば玉の夜の衣をかへしてぞぬる

たのまじと思はぬとてもいかゞせん夢より外にあふ夜なければ  
など詠み出で、夢の國にて彼の君に逢ふのみであつた。

色見えでうつらふものは世の中の人心の花にぞありける

は、若しやお召しの玉の御聲もやと期待せる機會が、中々に來らざる所から、

遂にかの君にはもしや心變りがあらせられたのではないかと、懊惱の心境を詠んだものである。

ちはや振る神も見まさば立ち騒ぎあまのとははの樋口あけたまへ

は、彼女が、勅命によつて祈雨の座にて詠み出でた名歌であつて、沛然たる大雨をよび、歌人としての彼女の名聲は高まつたけれども、彼女の心に秘めたる大願は、遂に成就の機來らなかつた。

かくして御代も代り、彼女も次第に老境に入つて

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

と叫ばしむるに至つた。後年には小野の里から井出の玉川あたりに移り住み、陽成天皇の御代の終りか光孝天皇の御代の始めかの七十前後で、この一世の麗人が此の世を終つて居るのである。

色も香もなつかしきかな蛙なく井出のわたりの山吹の花

は、その晩年の作であつて、新後拾遺集に見えて居る。

### 三、小町と現代婦人問題

#### 1 ノラ・エリーダと現代婦人問題

イブセンの人形の家は、家庭に人形として育てられ、嫁して夫に人形の如く扱はれたるを憤慨して、妻となり母となる前に先づ人間とならねはならないと叫んで、夫を捨て愛兒を捨て、家出をしたノラを描いたものである。而して、そのノラが歸つて來たのは、同じくイブセンの海の夫人エリーダである。

先づその人形の家といふのは

「美しくて若いノラは、辯護士ヘルメルと結婚して八年、今はもう三人の子の母となつたが、ヘルメルは、うちの雲雀さんなど、言つて可愛がつて居るけれども、お互に心の底から眞面目に話し合ふ事はなつた。或る年ヘルメルは病

んで轉地療養をした時、ノラはその費用を高利貸クログスタッドから借りたが保証人に父の名を用ひ、しかも證文の日附は十月二日であるが之より先き父は九月二十九日に亡くなつて居るから、これは法律上文書偽造となるのである。法律に詳しくないノラは、夫のために妻が盡くすまごころは、法律は許す位に思つて、之を夫にも告げずに置いた。ヘルメルの病氣は全快して歸つて銀行の頭取となつたとき、クログスタッドはその銀行員であつた、ノラの舊友でクログスタッドと前に關係あつたリンデ夫人が、ノラに頼んでその銀行に就職をヘルメルに運動して貰うたところ、椅子があいて居ないので、クログスタッドを免職させてリンデ夫人を採用の事にした。クログスタッドはノラを怨んで、昔の證文をヘルメルに暴露した。ノラは、日頃夫が自分を愛して居つて、如何なる犠牲も辭さないと言つて居るから、この文書偽造といふ問題も、夫は許して何とか解決してくれるだらうと奇蹟的の期待を持つて居た。處が夫は烈火の如く

怒つて、ノラ貴様のために自分は名譽も地位もすべて棄てねばならない、かゝる偽善者とは露知らなんだ、お前は己の幸福を破壊して了つた、己の前途を暗黒にして了つたのだ。もうお前には子供を教育する權利はない」と叱りますとノラは、如何なる犠牲も辭せずお前を愛するなど、ヘルメルが日頃言つて居つたのはウソであつたかと思つて居ると、リンデ夫人は、クログスタッドがノラを苦しめるのも、畢竟失業からであるから、いつそのこと自分がクログスタッドと再婚すれば、その失業問題は自然解決と思つて、クログスタッドに申込み承諾を得た處から、クログスタッドはヘルメルにその證文を焼き棄つる事を申し出て實行した。そこで、今まで鬼の様に怒つてゐたヘルメルが「ノラ助かつた、相變らずお前はうちの可愛い雲雀さんだ」と云ふと、ノラは、夫の利己的の行動から深く自分を見詰めて、その無自覺であつたことに氣付き、「お父さんは私を人形の子として育てました、そしてあなたはわたしを人形の妻とし

て玩具にしました、私は妻となり母となる前に先づ人間にならねばなりません」と言つて、狼狽せる夫に結婚の指輪を返して、人形の家を立ち去つた。」は、その大要であつて、これが婦人の聖典としてあらゆる國語に翻譯せられ、婦人問題に大なる衝動を興へたのである。後イブセンは更らに海の夫人を書いた。

ノルウエーの西海岸の一寒村に、燈臺守の父娘がゐた。母親を早く失つた娘のエリーダは、一度も船に乗つて海に乗り出したことはなかつたが、海が大變すきであつた。エリーダ二十歳の時、こゝに寄つたアメリカの商船の一船員のフリーマンと婚約したが、フリーマンは船長と口論して殺害したので、エリーダを伴ひ行くことが出来ずに、將來いつか再び訪ねて来て連れて行くと言つて姿を晦ましてしまつた。その後度々彼から便りがあつたが、エリーダは一時の夢から覺めた様に、フリーマンの事など思ひ出さぬ様になつたと

き、父も失つて孤兒となつた。そこに妻を亡くした土地の醫師ワンゲルの申込のまゝに、その醫師と結婚した。その家庭には、エリーダとあまり年齢の違はない繼子二人あつた。醫師は間もなく郷里の町に引込み、エリーダは海の懐しさと繼子との折合よくない處から憂鬱に陥り、ワンゲルはこれを心配して庭に小さいあづま屋を建て彼女を憩はせた。

十年ばかりの後に、フリーマンが今は船員でなく異國の一旅人としてそのあづま屋の前に現はれ前約を迫まつた。ワンゲルは之を詰つて結局エリーダの自由意志によつて決定せしむる事になつた。そこで一日中エリーダは考へた「フリーマンとの婚約は、彼は催眠術のやうなあやしい暗示を興へて海へ連れて行かうとしたのである。ワンゲルとの結婚は、金で買はれたのだ。自分が孤兒となつて困つて居り、彼は妻を失つて淋しい處から、御互に利益の交換であつたのだ。いかなる勞働をしてもいかなる運命となつても、自分の自

由意志で自分のえらんだ道を歩かなければならなかつたのだ。かく考へれば寧ろフリーマンとの婚約の方はまだしも純粹の處がある」

遂に彼女は意を決して「フリーマンとの約束は自由意志で結んだ以上あなたと別れるより外に途なし」とワングルに申し出た。ワルゲルは苦しい胸の底から彼女の自由意志を尊重して之を許すと云ふと、エリーダは夫が妻の自由意志、妻の人格を認めて呉るゝのに感激して、フリーマンには永久の別れを告げて、ワングルの腕にすがりついて「ああこれからはわたしどんなことがあつてもあなたの傍は離れませんわ」ワングルは喜ばしげに「ではエリーダこれでお前はわしの手へ戻つて来たんだね」ええありがたう。ほんとにさうなんですわ。それも自由に……わたしの自由意志で戻つて行くのですわ」かくてワングルも感激の喜びに溢れ、先妻の娘であるヒルデとボレッツでもエリーダの傍へかけよつて「どうぞいつまでも妾達と一緒にゐて下さいね」

と口を揃へて云ふ。

折柄町の方から壯快な樂の音が響いて來た。見ると靜かな入江の上を大きな汽船がゆるやかに滑つて行くのであつた。」

は、その「海の夫人」の梗概であつて、このエリーダこそ人形扱ひを受けたノラが家出してから人間となつて歸つて來た姿をイブセンが描いたものである。新らしき家庭問題、結婚問題をイブセンは「人形の家」にて提出し「海の夫人」によつて解決を示したものである。而してこの自由意志エリーダは我國に於て平安朝の始めに佳人小野小町に之を認むるを得るのである。

## 2 小町と現代婦人問題

小野小町は名門の出であつて、絶世の美人でもあり、卓絶せる歌人でもあつたので、その勅選集に入りし和歌は、紫式部の五十八首に比して六十一首の多數に達して居る。されば當時この高嶺の花を手折らんとする求婚の問題が、降

る様にあつたのであるから、彼女がもし家庭を作らんことを欲したならば、相當の好配偶を得て、幸福なる一生を送り得たであらうが、一切の申込を拒絶して獨身を通したのである。茲に於て乎、その謝絶せられた多くの男性は、遂に小町を以て不具者の如き悪宣傳をさへ爲したと傳へられて居るが、彼女はやんごとなきお方の寵を得て、冬嗣等のために妨げられたるも、いつかは召し出さるゝを念願申し上げて、その節操を保持して居つたのであることは、すでに縷述した通りである。エリーダは自由意志によつてワンゲルを得たのであるが、小野小町は自由意志によつて夫たらんとする人々を斥け、彼の君を慕ひ申し上げ遂に處女のまま孤獨の生涯を閉ぢたのである。後選集にある小町の歌の

花さきて實ならぬものはわたつみのかざしにさせる沖津白波

を讀むものは、花は咲いても實ならぬに終ること、恰も大海がかんざしにさしてゐる白波の如くで、たゞ空しく美しく崩れ落つる姿は、自分とよく似て居るとの

彼女の述懐に、萬斛の同情を禁じ得ないであらう。しかしこれも彼女の自由意志によつて自ら選びしものであるから、其の責任は彼女自ら之を負ふ可きである。殊に一面より之を考へ來れば、彼女の一生は、必ずしも實ならぬ花ではなかつたのである。風教の嚴肅ならざる平安時代にあつて、自己の固き意志によつて、節操高き才色双絶の佳人たる芳名を不朽に傳へたと共に、後の世の婦人問題にも、多くの示唆を與へ居るのであるから、或る意味に於て、實に大なる實を結んだと言ひ得やう。黒岩涙香氏は「小野小町論」に、左の歌を録して永久に褪せざる花と稱揚して居るが、實に千古の淑媛と謂つ可きである。

とこしへにあせざる花や和田つ海のかざしにさせる沖つ白波

○詠史（小野小町）

光榮の孤獨も己が自由なる意志の力となづかれけり

## 清少納言と紫式部

### 一、共に時代の産める寵兒

平安時代中藤原氏全盛の時代は、又文學興隆の時代であり、女性の華やかに活躍した時代である。特に殆んど時代を同うして、獨り平安朝のみならず、日本歴史全體を通じても稀有なる二人の才媛があつた。一人は清少納言。一人は紫式部。

清少納言は、清原元輔の女で、この元輔は、日本紀の撰者として有名の舍人親王の子孫である。天曆中には、和歌所寄人と爲り、村上天皇元曆五年には、坂上望城、紀時文、大中臣能宣、源順と共に梨壺の五人に加はり、勅によりて後撰和歌集を撰して居る。

紫式部は、藤原冬嗣の六子良門六世の孫越後守藤原爲時の女で、曾祖父兼輔

祖父雅正、伯父爲頼、兄惟規なども、みな和歌文章を以て世に顯はれて居る。兩女共にかく文學の家庭に生れ、幼より聰明であつて、和漢の學に精通の教育を受けて居つたが、清女は、關白道隆の女定子の方が、一條天皇の中宮とならせ給うて、才識ある女房を求めらるゝ折柄、選ばれて宮仕への身となり、紫女は、御堂關白道長の女彰子の方が、入内後道長の推薦によつて等しく宮仕への身となつたのである。尤も清女は、定子皇后（彰子中宮となりしより中宮定子は皇后となる）に仕へ申したのが機縁となつて、その才氣を縱横に發揮したのであるが、紫女は、彰子中宮に仕へ申す前において、すでに源氏物語りを著作して聲名を馳せ、道長はその天才を見込んで聘用方を取計つたのであるけれども兩女共にこの文學興隆の時代の産める寵兒であつたのである。

### 二、清少納言の男性觀



1 古文中の至寶枕草子

清少納言は、一代の散文詩人であつた。其の作枕草子は、實に古文中の至寶と謂はれ、かの兼好法師が南北朝時代に之に倣つて徒然草を書いてから、二大隨筆と稱さるゝに至り、江戸時代になつて、松平樂翁の花月草紙なども、之に擬したのである。清女は、中宮から賜つた草紙に、宮廷内の出來事、世間の噂自然の風物、嬉しい事、悲しい事を何くれとなく片端から書き列ねたのが本書であつて、大體は長徳年間に書いたものゝ様である。かの有名なる香爐峯の雪の話は、枕草子二百六十七段に次ぎの如く出て居る。

雪いとたかく降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、すびつに火おこして物語などして集まりさぶらふに「少納言よ。かうろほうの雪はいかならん」と仰せられければ、みかうしあげさせてみす高くまきあげたれば、わらはせ給ふ。人々も皆さる事はしり、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつ

れ、猶此の宮の人にはさるべきなめりといふ。

これは言ふまでもなく、白氏文集十六に「香爐峯下新トニ山居ニ草堂初成、偶題東壁」として「日高睡足猶慵。小閣重裘不レ怕レ寒。遺愛寺鐘欵枕聽。香爐峯雪撥レ簾看。匡廬便是逃レ名地。司馬仍爲ニ送レ老官。心泰身寧是歸處。故郷何獨在ニ長安。」の詩から出たもので、學才の秀でられたる定子中宮は、この詩を暗んぜられて「香爐峯の雪は」と問はせられた時、清女は即座に御簾を撥げて應答したのである。「此の宮の人にはさるべきなめりといふ」は此の中宮に奉仕する人としては、清女は適任なりと人々のいひはやしたることを意味して居つて學才の秀でらるゝ定子中宮のお話相手には、この博學識才の清少納言はげに適任であつたのである。

今や、小林信子女史によつて、ロンドン市ジョン・マレイから、東方知識叢書の一冊として、昭和六年に英文の枕草子 (The Sketch Book of The Lady

Seishonagon) が公にされたから、弘く世界的に紹介されて居るのである。

## 2 其の男性観

清少納言も、一生獨身であつたといふ説もあるが、正四位下右中辨藏人攝津守藤原棟世の妻となり、女子を産み、その女も歌人であつて、「白妙の光にまがふ色みてやひもとく花をかねて知るらむ」の新拾遺集中の歌は。實にその女の詠である。

枕草子中には、家庭に關し又親子の眞情に關する彼女の感想も散見して居るが、世の男性に對しては、人情を解し、眞心あつて才能すぐれたるを喜び「な sake あること」の條に「大かた心よき人のま心かどあること、男も女もありがたき事なめり」と云つて居る。「心かど」とは眞實の心と才能との二つを意味して居る。又無趣味で人情を無視するをいたく嫌つて、「男こそあやしきものはあれ」の條に、之を論じて居る。「はづかしきもの」の條下には、「男の心の中。いみじ

くあはれに心ぐるしげに見捨てがたき事などをも、いさゝか何とも思はぬもいかなる心ぞとこそはあさまじけれ、さすがに人の上をばもどき物をいとよくいふよ」として男性が己れを反省せずして女性のみを責むる暴君的態度を罵つて居る。「ありがたきもの」の條下には先づ第一に「舅にほめらるゝ婿、又しうとめにおもはるるよめのきみ」を擧げて家庭の平和一家の和樂團樂を力説して居るのは誠に卓見と謂つ可きである。

## 三、紫式部の女性観

### 1 世界の驚異源氏物語

或る學者は、英國にセーキユスピヤーなく、獨逸にゲユーテなく、佛蘭西にマリド、フランスなく、支那に施耐庵なく、伊太利にダンテやボツカチオ無き時代に於て、我國に大卷源氏物語を書きたる紫式部を出したのは、實に世界の

驚異の一であると言つて居る。

同書は、桐壺の巻から始まつて夢浮橋までの、五十四帖からなる大小説である。昔因州の土宮木善右衛門孝庸が其の師細川幽齋に、日本文學中に歌の手本となるもの處世の参考となるものは何かと尋ねた時、幽齋は言下に、何れも源氏物語だと答へたとの事である。

この名著は、紫式部が長保三年四月に夫宣孝に死別して、寛弘三年宮仕へする前迄の寡居時代約五ヶ年間に創作されたので、その前半には、光源氏をめぐる華やかな宮廷生活が描かれ、そこに桐壺更衣、藤壺、弘徽殿女御、六條御息所、空蟬、軒端萩、夕顔、葵、末摘花、花散里、五節君、明石の上、紫の上、臘月夜の内侍、源典侍、大輔命婦、朝顔齋院、秋好中宮、明石中宮、雲井雁、近江の君、女三の宮、落葉の宮等の多種多様な性格の女性と、さまざまの戀が物語られて居り、後者には、薫君の沈んだ淋しい生活を宇治の山莊を舞臺と

し、宇治の姫君浮舟等の女性を配して描いて居つて、そのモデルには歴史上の事實を假託し、竹取物語や伊勢物語、宇都保物語、落窪物語、大和物語等を参照し、白氏文集殊に長恨歌、遊仙窟、文選、史記、天臺六十卷、莊子、春秋左傳、資治通鑑などの佛書漢籍等にも少なからぬ影響を受けて居るのである。今その中の長恨歌は有名のものであるから、次ぎに全文を紹介する事とする。

長恨歌

漢皇重色思傾國	御宇多年求不得
揚家有女初长成	養在深閨一人未識
天生麗質難自棄	一朝選在君王側
回眸一笑百媚生	六宮粉黛無顏色
春寒賜浴華清池	溫泉水滑洗凝脂
侍兒扶起嬌無力	始是新承恩澤時

雲鬢花顏金步搖  
春宵苦短日高起  
承歡侍宴無間暇  
後宮佳麗三千人  
金屋粧成嬌侍夜  
姊妹弟兄皆列土  
遂令天下父母心  
國官高處入青雲  
緩歌慢舞凝絲竹  
漁陽鼙鼓動地來  
九里城闕烟塵生  
翠華揚々行復止

芙蓉帳暖度春宵  
從此君王不早朝  
春從二春遊一夜  
三千寵愛在一身  
玉樓宴罷醉和春  
可憐光彩生門戶  
不重生男重生女  
仙樂風飄處  
盡日君王看不足  
驚破霓裳羽衣曲  
千乘萬騎西南行  
西出都門百餘里

六軍不發無奈何  
花鈿委地無人收  
君王掩面救不得  
黃埃散漫風蕭索  
峨眉山下少人行  
蜀江水碧蜀山青  
行宮見月傷心色  
天旋地轉回龍駁  
馬嵬坡下泥土中  
君臣相顧盡沾衣  
歸來池苑皆依舊  
芙蓉如面柳如眉

宛轉蛾眉馬前死  
翠翅金雀玉搔頭  
回首血淚相和流  
雲棧繁紆登劍閣  
旌旗無光日色薄  
聖主朝々暮々情  
夜雨聞鈴腸斷聲  
到此躊躇不能去  
不見玉顏空死處  
東望都門一信馬  
太液芙蓉未央柳  
對此如何不淚垂

春風桃李花開夜  
西宮南苑多秋草  
梨園弟子白髮新  
夕殿螢飛思悄然  
遲々鐘鼓初長夜  
鴛鴦瓦冷霜華重  
悠悠生死別經年  
臨功道士鴻都客  
爲感二君王展轉思  
排空馭氣奔如電  
上窮碧落下黃泉  
忽聞海上有仙山

秋雨梧桐葉落時  
宮葉滿階紅不掃  
椒房阿監青娥老  
孤燈挑盡未成眠  
耿耿星河欲曙天  
翡翠衾寒誰與共  
魂魄不曾來入夢  
能以二精神一致魂魄  
遂教二方士段勤覓  
升天入地求之徧  
兩處茫茫皆不見  
山在二虛無縹渺間

樓殿玲瓏五雲起  
中有二人一字太眞  
金闕西廂叩玉局  
聞道漢家天子使  
攬衣推枕起徘徊  
雲鬢半偏新睡覺  
風吹二仙袂一瓢及舉  
玉容寂寞淚欄干  
含情凝睇謝二君王  
昭陽殿裏恩愛絕  
回頭下望二人寰一處  
唯將二舊物一表二深情

其中綽約多仙子  
雪膚花貌參差是  
轉教二小玉一報二隻成  
九華帳裏夢魂驚  
珠箔銀屏邈迤闌  
花冠不整下堂來  
猶似霓裳羽衣舞  
梨花一枝春帶雨  
一別音容兩渺茫  
蓬萊宮中日月長  
不見二長安一見二塵霧  
鈿合金釵寄將去



釵留二一股二合一扇

釵壁二黃金二合分二釵

但令三心似二金釵堅一

天上人間會相見

七月七日長生殿

夜半無一人私語時

在天願作比翼鳥一

在地願爲連理枝一

天長地久有時盡

此恨綿々無二絕期一

この長恨歌は唐の玄宗皇帝と揚貴妃との悲戀物語を、白樂天が漢皇に擬して詠んだのであつて、我國にては、平安時代から有名となつて、今昔物語、源平盛衰記、太平記、曾我物語等にも見え、謡曲にも「揚貴妃」があり、淨瑠璃には紀海音作の「玄宗皇帝蓬萊島」、近頃の戯曲近藤經一氏の「玄宗と揚貴妃」岡本綺堂氏の「揚貴妃」菊池寛氏の「玄宗の心持」なども、その題材をこゝに求めて居るが、源氏物語中にも桐壺の巻を始めとし、葵の巻、夕顔の巻、幻卷、宇治十帖の宿木の巻にも、その影響を受けたる處を一々指摘することが出来る。

今や英國の東洋學者アーサー・ウオレイ氏によつて、英譯源氏物語も公にせられ、一千年の昔、一日本婦人の手に成つたダンテの神曲よりも先だつこと約三百年のこの世界最古最大の長篇小説たる源氏物語が、遠くやしまの外までも匂ひわたつて、廣く世界文學の上に貢獻を見ることは、日本女性のために萬丈の氣を吐くものと謂ふ可きである。

## 2 其の女性觀

「紫式部日記」の中には、清少納言其他を批評した一節があるが、これはその兒賢子に送つた消息文が、まぎれ込んだのであつて、こゝには彼女の女性觀よりも寧ろ家庭訓を認むることが出来るのである。彼女の女性觀の中心をなすものは、源氏物語帚木の巻中の「雨夜の品定」である。それは、つれづれと降り暮してしめやかなる宵の雨に殿上にも人少なき折、源氏の君と頭中將と左馬頭と藤式部丞と相會して、思ひ／＼に女性に對する意見やら體験を述べる組織に

なつて居り、完全の女性は得難いものであり、上流中流下流では、中流こそよ  
けれと斷じ、細工物、繪畫、書道の三技藝に比喻を取つて女性の本質を論じ、  
良妻選擇の困難なる事や、嫉妬深き女、浮華放縱の女、柔弱の女、賢慮の女な  
どに接したる體驗談も出で、結局溫良謙抑の女こそよけれとの結論に達して居  
るのである。この席上彼女の代名詞と見るべき左馬頭が「今はたゞ品にもよら  
じ、容貌をば更にも言はじ。いと口惜しく、拗けかましきおぼえだに無くばた  
ゞ偏に物眞實に、靜なる心の趣ならむ寄邊をぞ終の頼所には思ひ置くべかりけ  
る。餘りのゆゑよし、心ばせ、打添へたらむをば、喜びに思ひ、少し後れたる  
方あらむをも、強ちに求め加へじ。後やすく長閑けき所だに強くば、うはべの  
情は、おのづからもて附けつべき業をや」と言つて居る。即ち「もう上流だの  
下流だのの階級も問題にすまい、容色の好き嫌ひなどは一層口にすまい。我慢  
のできぬほどひねくれて居ることさへなけりや、専心夫大事に仕へてくれる氣

立のやさしい女をば偕老同穴の愛妻と定めて置くが最上である。もしその女に  
趣味品格等が餘分に添うて居るならば、慮外の幸福と打ち喜んで、少々位の缺  
點不足があらうとも無理な註文はいたしますまい。餘事は兎もあれ、御互の間  
の根本の愛について、安心して信じてやる事が出来るといふ點さへ大丈夫な  
らば、表面の技巧などは、自然と後から附け足すことが出来るものですよ」と  
言つて妻女選擇の標準並に夫婦和合の要訣を示して居る。筆者も多くの男女青  
年の間に起つて、月下氷人をやつたことがあるが、この趣旨と一致せるものは  
よく一家の和合と日新の精進とを得て、幸福なる家庭を建設して居る。

#### 四、兩女の貞操問題

平安朝の二大天才女である清少納言と紫式部の節操問題は、古來種々に傳へ  
られて居る。元來王朝時代は天下の富の都に集つた時代である。世は太平無事

で政事上の混乱も軍事上の動擾もなかつた時代である。すでに金と時とを得たる月卿雲客が、花晨月夕に狂奔亂舞し、青山白水に吟歌朗詠して、文弱の情風滔々俗を爲し、異性の交際の如きも武家時代、徳川時代の如く秩序立たず、彼の業平西行と共に平安朝の歌道三大才人と云はるゝ和泉式部が、よからぬ噂を多く生んで居るに徴しても、當時の一般の空氣を察することが出来る。この間に處して、清少納言、紫式部は如何なる様子であつたらうか。

詞花集第八にある

心かはりたる男にいひつかはしける

忘らるゝ身はことわりと知りながら忍びあへぬは涙なりけり

の清少納言の歌を見ると、彼女はまた宮仕へせず里亭に居つた頃、戀人のあつたことゝ思はれるが、その何人であるかを明にしない。その宮仕へ中は頭ノ中将齋信、頭ノ辨行成、源中将宣方、修理ノ亮則房等が、特に親しく日夕彼女の

局に出入した様であるけれども、これは淡泊なる交際であつた様である。而して嘗つて齊信が夫婦の様に親しくなりたと言ひ寄りましたとき、そんな關係になつたらば、貴君の才學を人の前で賞められない様になるからと言つて、言よくのがれて、彼をして「頼もしげなことや」と斷念せしめた事がある。又行成が、一夜中宮の職に參つて、彼女と遅くまで話して歸り、翌朝「夜をとほして昔物語もきこえあかさんとせしを、とりのこゑにもよにされて」と申越したとき、かの百人一首にある

夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふさかの關はゆるさじ

の歌に「心かしくき關守の侍るめり」と添書して、支那の函谷關を通るとき夜が深くて關が開かないので、鶏の鳴き聲を眞似て關を開けさせたといふが、こゝには心かしくき關守が居るから、どんなに遅くまでお話しになつた處で私はなか／＼なびきませぬよとの意を申し送つて居る。



群書類聚の中の清少納言集には

忘れずよ又かはらずよかはらやの下たく煙したむせびつゝ

賤の屋のしたゝく煙つれなくてたえざりけるも何によりそも

と實方中將との贈答の歌を載せてあるが、これは唯ならぬ關係であつたらしい。定子皇后崩御後宮仕へを辭し、いつしか棟世の妻となつて、其の任國筑前、攝津などにも來り、晩年に又都に隱退、一切舊知の交際を絶つて

月見れば老いぬる身こそ悲しけれ遂には山の端にやかくれむ

など詠み出で、老年まで永らへ彌陀の來迎を待つ外は何の望みもなかつた様である。かの誰れ知らぬものもなき「駿馬の骨を買はずや」の話柄の如きは、機智縱横なりし清少納言が、その宮中生活のあまりにも華やかなりしに係はらず晩年振はざる様子であつた處から、後世に想像を以て作爲したものに過ぎない。紫式部に至りては、時代の通弊に陥らずその三十七年の生涯において、夫宣

孝以外の男子に向つて毫も許す處なかつたのである。

道長が

よもすがらとばかりたゝく水鶏ゆゑまきの戸口にたゝきわびつる

即ち「昨夜は夜通し水鶏にまさりてそなたの寝たる戸口を泣くくたゝきわびたり」と申越したに對して

たゞならじとばかりたゝく水鶏ゆゑあけてはいかに悔しからまし

即ち「只管思ひ給ひて叩き給ひしにあらじ、只假初に思ひでの事なれば、戸を明けたらば如何に悔しからん」とかへしうたして、之を拒斥したのである。眞に紫式部は關白道長の威望を以てしても、之に靡くの弱者ではなかつたのであつて、清きことなほ泥土に染まぬ白蓮の如く、強きことなほ百尺巖頭の孤松の如くであつたのである。論者或は彼女の

めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の月かな

や又「あひ見んと思ふ心は松浦なるかじみの神やそらに知るらん」の歌によつて、情人のあつたであらうなど、憶測するのは、この歌が女友達との贈答の作なる事を知らざるより来る誤りである。湖月抄に添へた系圖の註に、藤原道長の妾などあるのは何の根據もないので、天才に對する冒瀆も甚しいと謂はねばならない。

かくの如く貞淑にして節操正しき紫式部は、長保元年正月藤原宣孝に嫁して翌二年には一女賢子の大貳三位を産み、同三年四月には早くもその最愛の夫に死別といふ大打撃を受けたのであつたけれども、その悲しみの中よりも、世界の名著源氏物語りを創作し、子女の家庭教育にも苦心して、愛兒賢子の將來を玉成したのである。才女紫式部は、又貞婦紫式部であり、賢母紫式部であつたのである。

○詠史（清少納言）

香爐峯その雲よりも暈よりも清くも高き榮華かな

○詠史（紫式部）

外圓のはてまで匂ふ紫のゆかりの色を仰ぐもろびと

## 巴御前と伊賀局

### 一、平安女性と武家時代の女性

情念偏重の平安時代にあつては、優しき女流文學者の輩出を多く見たのであるが、公卿政治はいつしか武家政治に轉向するに至つて、こゝに質實剛健を尙ぶ時代精神が、女性の上にも反映して、尙武的女性、意志的女性の出現を見るに至つたのである。而して巴御前は平安女性の殻を破つて鎌倉女性の先驅を爲せるものであり、伊賀局は、吉野朝時代に於ける大力無雙の女性であつた。

### 二、女丈夫の雙壁巴と伊賀

#### 1 六十人力の剛の者を噓したる巴

旭將軍木曾義仲には、四天王といつて、樋口次郎兼光、其の弟今井義平、根

井幸親、楯親忠の四人の勇將があつた。兼光、義平は共に信濃權守中原兼遠の息、巴御前はこの兼光義平の妹であつて、その父が義仲を後援し、その母が義仲の乳母であつた關係から、義仲の愛人であつたのである。

義仲は、頼朝と共に以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ、北陸道より連戦連勝、平家は戦はずして西海に走り、義仲は遂に頼朝に先だつて京都に入り、從五位下左馬頭となつて京都守衛の任に當つたが、專横放恣の處から、後白河法皇は頼朝に密旨を賜はつて、義仲を討たしめ給ふ事になつた。壽永三年正月二十日頼朝方の範頼、義經の軍勢が、義仲軍の守れる勢多宇治を攻めて之を破り京都に入つた。彼の佐々木四郎高綱が、梶原源太景季と宇治川の先陣を競つたのも此の時である。義仲敗兵を收めて勢多を防いだが、遂に近江の粟津で戦死した。此の時巴は義仲に従つて陣中にあつたが、武藏國住人秩父の流島山庄司郎重忠が、巴と廻り合つて、その弓手の鎧の袖に取り付いた際、巴は信濃第一の強馬

春風に一鞭あてあふつた處、鎧の袖引切りて二段計り延びたので、畠山は「是は女には非ず、鬼神の振舞ひこそ、かやうの者に矢一つをも射籠められて、永代の恥を残すべからず、引くに過ぎたる事なし」と言つて、河原を西へ引退いて院の御所へ歸つた。更らに、遠江國住人で、六十人力の剛の者内田家吉に近づいて、「天晴武者の貌哉。東國には小山宇都宮殿。千葉足利殿、三浦鎌倉殿、審な誰人ぞ、かく問ふは木曾殿の乳母子に中三權頭兼遠が娘に巴と云ふ女也、主の遺の惜しければ、向後を見んとて御供に侍る」と呼びかくなれば、家吉は、「鎌倉殿の仰を蒙り勢多の手の先陣に進るは、遠江國の住人内田三郎家吉なり」と名乗つて進み、遂に馬上組討となつて、内田は巴の爲めにその首を搔かれて仕舞つたのである。

かく畠山重忠を走らせ、内田家吉を虜したる巴は、義仲の敗軍僅に七騎となつたときにも、なほその一騎に加はつて居つて、共に討死の覺悟であつたが、

義仲より「誠にさこそは思ふらめ共、我去年の春信濃國を出でし時、妻子を捨て置き、又再び見ずして永き別の道に入らん事こそ悲しけれ、去れば無からん跡までも、此事を知らせて、後の世を弔はゞやと思へば、最後の伴よりも然るべしと存するなり。疾う／＼忍び落ちて信濃へ下り、此有様を人々に語れ、敵も手繁く見ぬ、早々」と促すより、巴は遺は様々惜しけれども、主命に随つて、落つる涙を拂ひつゝ上の山へ忍び入り、信濃に下つて女房公達にかくと語つて互に袖を絞つたのであつた。後、彼女は尼となつて、越後長松に移り、終生懇ろに義仲の後を弔つた。源平盛衰記には後、和田義盛の妻となり、朝夷三郎義秀を産むとあるけれども、これは誤りである事は、大日本史の豪言行録にも明言して居る所である。

## 2 怪物退治橋材引き折の伊賀

伊賀局は、新田義貞の部將、篠塚伊賀守の女で、御村上天皇の生母新待賢門

院に仕へ申した勇女である。女院の御所は、皇居の西の方にて山に續ける所にあつたが、正平二年の春の事、この御所の附近に怪物出現の噂立ちて、人々恐れ慄き、内裏から守衛の人たち多數出動して、一時は鎮まつて居つた。その年の六月中旬頃の月夜に、伊賀局は庭に立ち出で涼を納れ、誰も居らぬに

涼しさを松吹く風に忘られて袂にやどす夜半の月かげ

と口ずさみし處

唯だ能く心静なれば則ち身も涼し

といふ古き詩の一句をいふものあるより、四邊を見廻すとはいかに、鬼の形にて翼が生へ居り、眼は月よりも光り渡つて、恐しさ限りなき怪物が居つた。武きものゝふでさへ心も消え失せる程であるのに、局は落ち着き拂つて「何物なるか名乗れ」と誰何すると、我は院のために命を奉りたる藤原基遠の靈なりと答へて、法華經にて追弔を望む旨をも言つたので、局は早速之を女院に奏し

吉水の法印に御沙汰があつて、三七日法華經を供養せさせ給うた處、その後は敢て變つた事もなかつたとの事である。是は吉野拾遺に載つて居る一傳説であるが、局の沈勇の一面を物語つて居るのである。

又その翌年の正平三年正月楠正行等が四條囃に名譽の討死を遂げ、賊將高師直等が、吉野の皇后を犯し奉つた時、帝は中納言隆資の進言に依り、吉野天河の奥賀名生へ難を逃れ給うたのである。此の時女院も難を避け給うたのであつたが、守護し奉る侍もなく、僅に數人の女房がお伴申し上ぐるばかりであつた。一行は途中吉野川の上流で、橋が一間ほど流れ落ちて居るのに出逢つて、爲す術もなく途方に暮るゝのみであつた。此の時局は其ほとりの松櫻の大枝を引き折り引き折り打ち渡して、女院を負ひ奉つてお渡し申し、その他の女房達も事無く越ゆることが出来て、帝のおん後を追ふ事が出来たといふ。この局の豪勇には、驚嘆せぬものはなく、後になつて、女院はこの局が吉野川の渡しで

折つた大枝を、園部六郎といふ強力自慢の男に折らせて御覽になつたけれども六郎はどうしても折ること出来なかつた相である。局は後補正儀の妻となつて正儀の誠忠に内助の力を捧ぐる所あつたが、後龜山天皇の元中元年（二〇四四年）十月十三日に逝去して居る。吉野川架橋に膂力發揮の正平三年（二〇〇八年）より、まさに三十六年後である。

### 三、此の兄にして此の妹あり此の父にして此の女あり

巴の兄樋口兼光も今井兼平も、共に木曾の四天王であつて、曉勇絶倫であつた。兼光礪波の戦に平氏を破り、篠原の戦に畠山重能を破り、石川城に源行家を破り、恰も無人の野を行くが如く進んでのであつたが、一たび義仲の東軍と戦つて利あらざるや、さすがの驍將もまた起つ能はざるに至つた。兼平は壽永二年四月越中般若野に於て平盛俊と戦ひ、大に之を敗り二千餘人を斬つた、義

仲朝敵となつて東兵來り討つに及び、義仲の兵死傷殆んど盡きた。彼も陣中にあつて、義仲に自殺を勧め、單騎を以て追兵を遮つて居つた。義仲の死するを見て、自ら我れは是れ今井兼平なりと呼はり、衆其の勇を憚つて近づくものもなかつた。箴を顧みるとなほ八矢を餘まして居るので、乃ち射て八騎を殛し、「日本無雙の勇士今方に自殺せんとす汝曹視て以て我に倣へと高く叫んで遂に刀を銜みて馬より投じて死した。此等の兄を有する巴の武勇も決して偶然でないと思はれる。

伊賀の父篠塚伊賀守重廣は、武藏の人、又一説には上州長柄村宇篠塚に生れ同地大信寺にその位牌を存すとも傳へらる。栗生顯友等と新田義貞の四天王と稱せられ、驍猛多力。義貞さきに東征して利あらず、殘兵僅かに五百餘騎を以て退き歸るや。篠塚栗生顯友と共に伊豆の府八十萬の敵兵に當らんとし、衆を顧みて「五百を以て八十萬に當る、諸君今日は眞に是れ一騎當千なり」と呼ん

で、相率あひあひゐて轉戰、遂に義貞をして脱去だつぎするを得しめたのである。伊豫の世田城に大館氏明と共に據り、應曆三年細川頼春來り攻め、氏明力屈して自盡じじんし篠塚門を開いて突出、自ら名乗りて汝等我を斬りて賞を求めよと叫んだが、敵兵其の勇武絶倫に恐れて東西に披靡ひびし、篠塚悠々徐歩して立ち去る事が出来た。夜伊豫今張浦に抵つた處、敵は船を浦口に泊し、棹卒せうそつをして之を護らしめ居つた。篠塚は甲を帯びたまゝ海に入つて里餘も泳いで船に達した。棹卒驚いて之を詰問きつもんすると「身は是れ篠塚伊賀守である宜しく我が爲に船を進めて隱岐島に至れ」と、自ら起つて長檣ちやうせう十四五尋のものを建て、後寝に入つて鼾聲かみせ雷の如くであつた。舟を擧げて其の豪勇に震悚しんしよくして、遂に送つて隱岐島に至つたとの事である。これは大日本史に載する所であるが、其の伊賀の局の沈勇ちんゆうにして大力あつたのも眞に此の父にして此の女ありと謂いつ可きである。

#### 四、昭和の巴御前昭和の伊賀局

##### 1 水泳日本と國際オリンピック大會記録

本書を讀まるゝ青年諸君は、直接間接に明治神宮體育大會に参加さんかしたであらう。二十三種の競技に漲みなぎるスポーツ日本の繪卷は、まさに世界制覇せいぱを目指す新興日本の姿すがたでもある。筆者もさきに青年團選手を率ゐて、この龍擣虎搏りゅうたつこよくの大接戦に参加し、陸上競技フレスチフククスに於て、光榮ある優勝旗ゆうしょうきを獲得したる時の痛快さは、一生を通じて忘るゝ能はざる所である。今や國際オリンピックに於ても、我が水泳チームが壓倒あつたうてき的優勝であつたのを始め、各種競技に於て世界の日本たらしむべき自信と實力とが向上かうじやうしつゝあるのは、まさに聖代せいだいの一大盛事である。明年伯林に開かるゝ國際オリンピックの前奏曲ぜんそうきよくとも見るべき、昭和十年八月十七日より三日間、神宮プールに開かれたる第二回日米對抗水上競技に於ても、米の二七點に對する日本三六點の輝かがやかしき成績を以て、水泳日本の榮光えいこうを維持し、

十二の種目競技に於て夜霧にぬれたる紫色の空に白く翻る日章旗を仰ぎ、神韻の如く漂渺と夜氣を震はせる君が代を聴くことまさに七回。遊佐、石原田、牧野、根上の日本チーム八百米繼泳に於ては、八分五二秒二の世界の新記録さへ作るを得た。今千九百三十二年ロサンゼルスに開かれたるオリンピック・ク大会記録を見るに

陸上競技男子之部

種目	記録	保持者	所屬
百メートル	一〇秒三	トーラン	米國
二百メートル	二一秒二	トーラン	米國
四百メートル	四六秒二	カ	米國
八百メートル	一分四九秒八	ハンブソン	英國
千五百メートル	三分五一秒二	ベツカリ	伊太利
五千メートル	一四分三〇秒〇	レヒチネン	芬蘭
一萬メートル	三〇分一一秒四	クソチンスキー	波蘭

マラソン	二時間三一分三六秒	サバラ	亞爾然丁
三千メートル障碍	九分一四秒六	イツホロ	芬蘭
一萬メートル競歩	四六分二八秒四	ゴールディング	加奈陀
五萬メートル競歩	四時間五〇分一〇秒	グリオン	英國
高障碍	一四秒四	セーリング	米國
中障碍	五二秒〇	ハーティン	米國
四百メートル繼走	四〇秒	キーゼル	米國
千六百メートル繼走	三分八秒二	トイユフ	米國
走高跳	一メートル九八	アプロク	米國
走巾跳	七メートル七六五	フロウイツ	米國
棒高跳	四メートル三一	カ	米國
三段跳	一五メートル七二	オスボーン	米國
砲丸投	一六メートル〇一	レゼンダー	米國
		ミ	米國
		南部忠平	日本
		セクストン	米國



圓盤投 四九メートル四九  
 槍投 七二メートル七一  
 鐵槌投 五四メートル七四  
 十種競技 八四六二點二三五

陸上競技女子之部

種目 記録

百メートル 一一秒九  
 八百メートル 二分一六秒八  
 八十メートル障害 一一秒七

四百米繼走 四六秒九

走高飛 一メートル六五

圓盤投 四〇メートル五八  
 槍投 四三メートル六八

水上競技男子之部

アンダーソン 米  
 ヤルキイネン 芬  
 マツクグラス 米  
 パウシユ 米

保持者

所屬

ワラシエグイツツ 波蘭  
 ラトケ 獨逸  
 テイドリクソン 米  
 カアル 米  
 フチャール 米  
 プロチヤメンスチ 米  
 シヤイレイ 米  
 コーブランド 米  
 アイドリクソン 米

種目

記録

百メートル自由形 五八秒〇  
 四百メートル自由形 四分四八秒四  
 千五百メートル自由形 一分九分一二秒四  
 百メートル脊泳 一分〇八秒二  
 二百メートル平泳 二分四四秒九  
 八百メートルリレー 八分五八秒四

水上競技女子之部

種目

記録

百メートル自由形 一分〇六秒八  
 四百メートル自由形 五分二八秒五  
 百メートル背泳 一分一八秒三  
 二百メートル平泳 三分〇六秒三  
 四百メートルリレー 四分三八秒〇

保持者

所屬

宮崎康二 日本  
 クラツア 日本  
 北村久壽雄 日本  
 コヂヤツク 日本  
 小池禮三 日本  
 宮崎、横山 日本  
 豊田 日本

保持者

所屬

マサシマ 米  
 マガツソ 米  
 マガツソ 米  
 ホラル 米  
 デラ 米  
 マサシマ 米  
 マガツソ 米  
 マガツソ 米  
 マガツソ 米  
 マガツソ 米

であつて、尤も以上の中、陸上競技男子之部の鐵槌投は、千九百十二年ストックホルム、同走高跳、走巾跳は、千九百二十四年パリ、陸上競技女子之部の八百メートル、水上競技男子之部の百メートル背泳は、千九百二十八年アムステルダムに於て開かれるオリンピック大會の記録あるが、この記録では陸上競技にては僅に南部忠平君の三段跳が一種目見ゆるのみであるけれども、明年伯林の第十一回國際オリンピック大會、さては東京にこの國際オリンピックの開かれる頃には、この陸上競技も水上競技の夫れの如く一大飛躍を期待せらるゝのである。

## 2 世界の記録保持者人見絹枝嬢

女子に於いて今日尙ほ世界女子最高記録を、走幅跳の五メートル九八を以て保持して居るのは人見絹枝嬢である。同嬢は明治四十年一月岡山縣御津郡福濱村に生れ、岡山高女を経て日本女子體育専門學校に學び、京都第一高女教諭となり、後大阪毎日新聞の記者となつた。身長五尺六寸體重十五貫を算し、十七

歳の時から競技生活に入り、我國女子競技界に貢献する所多かつたが、芳紀まさるに二十五歳を以て昭和六年八月二日惜しくも病歿して居る。この走巾跳の世界女子最高記録は昭和五年（一九三〇年）ブラীগに開かれた第三回國際女子オリンピック大會に於ける記録であるが、その際六〇米、槍投、三種競技にもそれ／＼三等の成績を示し、昭和三年（一九二八年）アムステルダムの第九回國際オリンピック大會にも八〇〇米にて二等の成績を占め、日本女子最高記録では、五十メートル（六秒四）、六十メートル（七秒八）、百メートル（一二秒）、二百メートル（二四秒七）、走巾跳（五メートル九八）、三種競技（二二七點）の各種を保持して居る女流スポーツ界の雄者である。同嬢が、昭和五年ブラীগの國際女子オリンピック大會より歸朝後筆者に「トラック又はフィールドに於て戦線に立つたときは、常に死を決して奮闘いたしました」と語つた事があつたが、その昔巴御前が、義仲の陣中にあつて、常に死を決して奮戦力闘、義経方の勇將

島山重忠を走らせ、六十人力の剛の者内田家吉を殲した際の心境と、古今の女傑其の揆を一にすと謂ふ可きである。

### 3 米五俵を背負ふ酒田娘

昭和十年七月十二日東京朝日新聞第一萬七千六百八十四號、東西對抗カメラ問答の所報によれば、山形縣酒田山王さんのほとり米倉（酒田山居）の女性達は、米俵三俵四俵を軽々と背負つて、一俵ならば驅歩で走れるとの事である。一俵十六貫とすれば四俵ならば六十四貫、中には五俵（八十貫）まで背負ひ得る大選手もあるとの事で、其の名を聞けば兵藤みやゑ（二二四）、佐藤さま（二二二）の兩嬢である。男子も及ばざる大力伊賀局は、吉野朝時代の宮仕への女丈夫であつたが、これは片田舎の女子青年にて身分こそ異なれまさに昭和の伊賀局と謂ふ可きである。

### 4 日本女性體位の向上

我國の女性の體位は、文部大臣官房體育課の統計によると、全國平均において、十七歳の女子が明治三十三年に身長の一四六糎、一であつたのが、昭和七年には一五〇糎、九、體重の四五斤が四七斤、二、胸圍の七三糎、九が七六糎、三に進んで居つて、各年齢について見ても、略ぼ之と同じ割合位に進歩して居るのを認められ、昭和の巴御前、昭和の伊賀局の勇武さが、獨り人見絹枝嬢や酒田米倉の剛力娘に限らぬことを思ふとき、國家の將來のために誠にほゝゑますには居られないのである。青年諸君は、之に劣らざる様心身を鍛鍊して、健全なる家庭を作つたならば、家運の隆昌、地方の興隆、延いては國運の進展期して待つ可きである。

#### ○詠史（巴御前）

死を決し奮戦したるありし世を語りあふらむ友を迎へて

#### ○詠史（伊賀局）

己が愚蒙する女の子の數多く出づる御代、こそ祝ぎ奉るらめ

## 楠久子と松下禪尼

### 一、共に意志的女性の賢母

武家時代に武士道の發達したのは當然であつて、その武士道の精神は、華美柔弱の風を卻け、武藝を修めて心身を鍛錬し、卑法未練を戒め、禮儀廉恥を重んじ、質實剛健、儉素勤勉を尙ぶにあつたのである。この武士の氣風が、當時の女性にも影響して、彼の平安時代の女性が、徒らに鹿の鳴くを聞いては泣き紅葉の散るのを見ては涙を流すといふ様に、情愛にのみ偏したものが、此の時代の女性は、節義を尙び、一死以てその義に殉ずるの勇氣を持すると共に、家庭に於る母性を自覺し、其の夫を助け其の子を勵まして、武人の面目を損せしめない様に努むる意志的の女性に進展したのである。而して小楠公の母久子、最明

寺時頼の母松下禪尼などは、此の意志的の女性たると共に、家庭教育に成功したる賢母であつた。

### 二、北條氏の善政と松下禪尼

#### 1 泰時の善政

尼將軍政子の誤まれる家庭教育の指導精神が、義時の奸佞邪智に乗ぜられて源氏は僅に三代二十八年で亡んで居るが、北條氏は、義時が承久の亂に於て許すべからざる無禮を朝廷に加へ奉つたので、その天罰によつても、永く續かない様に思はれるが、遂に九代百餘年の榮を持続し得たのは、義時以後の執權は常に下を憐む仁政を施した爲に、義時を憎む人心は、何時しか薄らいで北條氏の仁政を喜ぶ念が次第に強くなつたからである。その北條氏の執權中で特に泰時、時頼、時宗の三人が有名である。

泰時は、義時の子であるが、父に肖ない良い心得の人であつた。承久の亂の時も父を諫めて「故なくして御鳥羽上皇が鎌倉征伐を思ひ立ち給ふ筈がない。何か上皇の御怒りに觸れてゐる事があるのでせうから、父上は京都に上つて、其の御怒りを解くやうになさるがよろしい。若しそれでも猶御咎めのある時には北條氏一同刑罰に處せられても憾みとは思はれません。萬一罰を御宥し下さるならば、山奥に入つて一生涯を送つてもよいではありませんか。臣下の分を忘れて兵を京都に差向けるのは畏れ多いことでもあります」と言ふと、義時は「京都に兵を向けるのは、天皇や上皇を御苦め申す爲ではない。斯様な事になつたのは、常に御所に入出入する者が悪いからである。其の悪者を懲らしめる爲である」と言つて泰時の諫めを用ひなかつた。已むを得ず泰時が出發したが、一旦鎌倉に引き返へして「もし道のほとりにも計らざるに辱く鳳輦をさきだて、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なる事も侍らむに参りあへらばその時の進退いかゞ

侍るべからむ」と尋ねた。義時は「かしくも問へるをのこかな。その事なりまさに君の御輿に向ひて弓を引くことはいかゞあらむ。さばかりの時は兜をぬぎ、弓のつるをきりて、偏にかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし」と答へた。是等の事は増鏡に見えて居る史實であつて、泰時は勿論義時のからだにも、日本人たる血潮が流れて居つたのであるが、この亂の結果は、臣道を誤つて、畏れ多き大缺點を敢て行つたのは、千秋の恨事であつて、逆臣義時の不忠を憤らぬものはないのである。筆者もさきに任に新潟及び島根に在つて、佐渡に参つては、順徳上皇の

いざさらば磯うつ波にこと問はんおきの方には何事かある

の御製、隱岐に参つては御鳥羽上皇の

われこそは新島守よ隱岐の海の荒き波風心して吹け

等の御製を偲び奉り、義時の不忠に思ひを致して、悲憤の涙に咽んだことがあ

つたが、泰時の心の中には、父の罪滅しの念願もあつたであらうか、飢饉の時などに施米を行ひ、富める者から米を借りる者の爲めに利息も拂つてやり、その爲めに自分は新しい着物も着ず、烏帽子も古いのを繕つて用ひ、晝は一食を減じ、夜は燈火を細くするまでの儉約を行つた。これは一例に過ぎないが、かゝる心懸で政治をしたから、天下の人民が泰時を慕ふことは、子が親を慕ふが如き有様であつた。

## 2 時宗の功勞

村田清風が

敷島の和心を人間はば蒙古の使斬りし時宗

と詠じたその時宗は、時頼の子で松下禪尼の孫である。十八歳で執權となつて三十四歳で亡くなつて居るが、在職十七年の間は、専ら心血を元寇に注いで、見事に元軍を退けた功績は、極めて大なるものがある。言ふまでもなく、文永

十一年（一九三四年）及び弘安四年（一九四一年）、兩度の蒙古襲來は、確かに我國の一大國難であつた。之より先き文永五年正月、蒙古の牒狀が來るや、鎌倉では國の重大事であるので朝廷に奏上し、牒狀の無禮の故に之を追却して敵國の侵寇を撃攘する大方針を立て、朝議の決意を促して牒狀を返附し、國防に力を注ぐことゝした。その三月には、時宗執權となつて一層その愛國的手腕を發揮したが、當時未だ僅に十八歳の一青年であつたのである。翌文永六年再度の牒狀に當つて、朝議が返牒を草せられたのも押へて牒使を退け、九州沿岸の防備を嚴にし、同八年蒙古使趙良弼を追却してからは、鎌倉在住の九州の家人を歸國させ、四國中國の家人をも漸次西下させた。蒙古が國號を元と改めたのはこの年頃からである。文永十年には、三たび來た處の元の使を追ひ返し、宗助國に對馬の備を嚴にさせ、九州各地の諸將士の協力を訓諭して非常時に備へさせ、士氣を鼓舞し、太宰府に命じて諸將士の指揮に任せしめて、何時元の軍

が攻め寄せても差支なき様に用意した。文永十一年いよいよ第一回の蒙古襲來所謂文永の役が起つた。元軍三萬、九百餘艘の船に分乗して、十月五日先づ對馬を襲うた。島主宗助國之を邀へて苦戦、衆寡敵せず遂に戦死した。賊は進んで豊岐を侵し、島主平經高も戦死を遂げた。賊軍は對馬豊岐の島々で、女性を捕へ其の掌に孔をあけ、荒縄を通して舷に繋ぐといふ様な惨忍極まる事も敢てして肥前に向ひ、更に筑前の博多に迫つて上陸した。時に十月二十日であつた。太宰府では、對馬豊岐からの情報を得て、急を京都六波羅に報ずると共に、九州の兵を動員、其の數十萬餘に上つて、何れも奮戦したが、當時我が軍は、甲冑を着けて武器は弔矢刀劍の類のみ、加ふるに戦術は一騎討であるに引換へ、彼は身輕な身拵への上に、鐵砲をも所持し居り、密戦法であつたから、我が軍は頗る苦戦であつた。併し賊は我が大軍と勇敢とに恐れを懐いて船に引返した處、夜に入つて暴風雨が起つて多くの船を覆した爲に、沈没を免れた元軍は急

ぎ本國に逃げ還つて、翌二十一日我が兵が海岸に出た時には、元の船の影も形もなかつたのである。

敵軍が逃げ去つた後も、我が國は少しも軍備を弛めず、元軍再來せざれば我より元に攻め入つて敵討をせんとする程の意氣込みであつた。建治元年の四月に復元の使が來た時、時宗は之を龍口に斬殺して決心を示した。この年の十月に時宗は、北條實政を九州に下して、其の防禦を嚴にさせると同時に、元に攻入る用意をさせた。實政は「明年三月頃には元に攻入る筈であるから、從軍希望者は姓名、年齢、財産、武器等を届出でよと命令した處、肥後國の八十五歳の井芹西向は、自分は高齡で意に任せないが、六十五歳の長男、四十歳の孫を是非從軍せしめたいと願ひ出で、眞阿といふ尼さんが、自分の子と娘の婿とを夜を日に繼いで參上せしむると申出でたる如き、志願者が續出して國民の意氣込みは實に最高潮に達した。しかしこの外征計畫は中止されたが、元軍襲來の

防備は更らに進められて、博多灣の海岸に長さ四里に亘る石の堤防を築いて、敵軍の上陸を防ぐ用意が建治二年八月に略出來上つて居る。

時宗が元の使を龍口に斬つてから四年目の弘安二年、元の忽必烈がしつこくも又々使を遣はし、「來年の四月迄に返事を貰はう。若し元の言葉に従はないならば、兵を進めて討つぞ」といふ様な相變らず無禮極まる書面を寄越したから時宗はその使者を博多で斬らせ、一層防備の充實を實行した。

果然弘安四年に、忽必烈は十數萬の大軍を東路軍、江南軍の二手に分けて大舉襲來せしめた。この報が都に傳はると、畏くも龜山上皇は石清水八幡宮に御參詣徹夜で戦勝の御祈禱をなさつた上、勅使を伊勢の皇太神宮に遣はされて、身を以て國難に代らんと御祈り遊ばされた。

さて攻め寄せた元軍は、石壘のために上陸出來ず、却つて我が兵に苦しめられて居る中に、七月晦日の夜中から翌日にかけて、神風とも云ふ可き大暴風雨

が起つて、十萬の兵を載せた江南軍の船は全部覆り、沈没を免れた東路軍の船も這々の體で逃げ歸り、江南軍中生還出來たのは僅に三名と傳へられて居る。

この大勝に國を擧げて誠歡誠喜に満ち、此翌年龜山上皇の御詠みになつた

四方の海波をさりまりてのどかなる我が日の本に春は來にけり

の御製を拜し奉つても、其の御喜びを想像することが出来る。

この弘安の役の大勝利は、國民上下一致して外敵に當た賚であるが、特に北條時宗の功績は歿すべからざるものがある。明治三十七年五月十七日には、時宗に従一位の御贈位があつた。

### 3 時頼の善政

時頼は、廉直の士青砥左衛門尉藤綱を重用して治績大に擧つた。後、奉行頭人私欲をかまへ、幕府の耳目を蔽ひ塞いで、下の情が上に達せざる憾あつた處から使を諸國に遣はし、無道なるもの二百餘人を斷罪して、良民の迷惑を去ら



しむる所あつた。

康元元年十二月三日執權職を長時に讓つて、最明寺で出家し、法名を道崇と稱したが、猶ほ幕府の重要な政治に參與して居つた。傳説によれば、時頼變裝して鎌倉を忍び出で、民情視察の諸國行脚を試みることに三年、諸國の間に三百四十餘人の非道のものゝを記して歸り、皆各々鎌倉に召しよせて、賞罰正しく行はれ、先代忠勤の家督を相續せしめたとの事である。此の時頼廻國の事は、吾妻鏡を史料として、専門家の間には、殆んど信ぜられないけれども、瀬川博士其他によつて、史壇の問題となつて居り、傳説としては十分耳を傾ける價値はあると思はれる。彼の有名なる謡曲「鉢の木」は、箇中の消息を描いた代表的のものである。

最明寺入道諸國行脚の途次、上野國佐野にて雪中に迷ひ、路傍の茅屋に一夜の宿を求めた。折節主人は留守だからとて、妻なる人が謝絶したのを、入

道主人の歸宅を門外に待つて居つたが、歸宅した主人も餘りに見苦しければと言つて許さない。入道やゝその無情を憤りながら立ち去つた處妻なる人は、我等のかく落魄するも、前世の業であらうに、せめてかゝる修業者だに一泊せしめたいと云ひ出て主人も之に同意し、僧の跡を追うて「のうく旅人御宿參らせうのう」と迎へて歸る。かくて粟の飯など進めて物語りして居る中に寒さ彌々烈しくなつたが焚くべきものもないので、なほ世に時めげる頃より秘藏の梅、櫻、松の鉢の木を伐つて焚火とした。入道はその厚意を感じつつ名字を尋ねて、此者は其の所領を一族に押領せられた佐野源左衛門常世であることが分つて、何故に訴訟せぬかと尋ぬる、最明寺殿も修業に御出での上に力なきことで御座ります。されども御覽候へ、これにちぎれたれども、武器一領、さびたれども長刀一えだ、やせたれどもあれに馬を一匹持つて居ります。今にてもあれ鎌倉に御大事出でくるならば、ちぎられたれども此具足取

つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参じて討死すべきであります。唯今かくして餓死せんことのみは遺憾なりと云ふ。入道はなほ絶望し給ふなと慰め、名残りを惜みつゝ出發する。やがて早打のもの走せちがつて大小名鎌倉によると見ゆる所から、常世も瘦馬に跨りて第一番に鎌倉に到着した。最明寺殿は、今度勢を召し集へたのも全く常世の詞の眞偽を確めんためだと言つて、その速に馳せ参じたのを賞め本領安堵のその上に、大雪降つて寒かりしに秘藏せし鉢の木を伐り火に焚きあてし志をば、いつの世にかは忘るべき、いでその時の鉢の木は、梅松櫻にてありしよな、其の返報に加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田合せて三箇の庄をも併せ賜ふとあつたから、常世は喜びの眉を開きつゝ、今こそいさめ此馬にうち乗り喜びに溢れて歸國した。

といふのは、その大意である。此の他にも謡曲「藤永」「浦上」「小夜碓」にも

最明寺入道が行脚の途次、所領を奪はれたる一族を救ふ筋を造つて居り「北條九代記」には、難波三郎兵衛尉の未亡人難波尼公が、最明寺入道によつて瓜生權頭に押領せられたる本領を取り戻すことを得たことを記して居るが、兎に角時頼は、人民の疾苦あれば、己が責任の如く感じて善政に勵んだのである。彼の最明寺殿教訓百首中の

佛にも神にも人はなるものをなどか心をあだにもつらむ

けふのみと思ひて親につかへかし定めなき世のあすなたのみそ

子を思ふおやほど親を思ひなば世にありがたき人といはれん

ひろく世をめぐむ心をさきにしてよろづの費いとふべきなり

上の上下の下まで世をわたる身のくるしみも皆くりにのため

等にあらはれたる時頼の信條と實行とが、武略を以てよく君を輔け、仁義を施して民を撫で、天意に達して人望に協ひし善政となつたのである。

4 禪尼は泰時を舅とし、時頼の母、  
時宗の祖母であつた

松下禪尼は高野入道安達景盛の女で、此の泰時の子北條時氏に嫁して時頼を産み、時宗にはまさに血を分けたる祖母である。時氏には、經時、時頼、時定、爲時、檜皮姫、外一女の四男二女あつたが、北條系圖にはその中の時頼だけに母は秋田城介景盛女と明記してあるのみであるから、時頼以外の子供は禪尼の實子であるか否かは不明である。時頼には、時輔、時宗、宗政、宗時、政頼、僧時嚴、宗頼、朝房等多數の子供があつて何れも禪尼の愛孫である。夫の時氏は正五位下修理亮になつた人で、承久の役には父泰時と共に従軍し、將士を愛禮して父の風があり、元仁元年には北條時盛と共に六波羅に鎮して南北に分治して居つたが、寛喜二年病のために鎌倉に歸つて、行年僅に二十八歳を以てその年の六月十九日に亡くなつて居るから、禪尼は紫式部の様に、餘程若くて未

亡人となつた様である。しかも鎌倉武士景盛の女と生れし禪尼は、春風桃李花開くの夜にも決して自己の薄命を歎かず、秋雨梧桐葉落つるの時にもまた人生の行路難を啣つことなく、勇猛心を以て雄々しくも又甲斐なくしく子供の教育に努力して、自ら幸福なる運命を開拓し、其の子孫の善政によつて、己が晩年にも榮光あらしめたのである。

三、禪尼の具體的家庭訓

武士道の影響を受けたる鎌倉時代の婦道の體現者松下禪尼は、又その家庭教育に於て武藝の奨勵を忘れたかつたのである。

嘉禎三年四月二十二日、時頼十二歳にて祖父泰時の邸にて元服し、その年の八月十五日には、鶴が岡八幡宮に放生會の流鎬馬に將軍の御前にて射手の役をめでたく勤め了せて居る。弘長元年四月二十五日には、時宗も同じく十一歳で

將軍宗尊親王の御前で極樂寺境内の小笠懸に美事に的中して居る。此の流鏑馬も笠懸も、犬追物を併せて「馬上三つ物」と稱せられて居る剛壯なる騎射の武藝であつて、時頼も時宗も、幼時よりこれを修業して且上達して居つたに徴しても、禪尼の家庭教育は、優柔懦弱を戒め質實剛健の精神の溢れて居つたことを察するに難くないのである。

「相模守時頼の母は、松下禪尼と云つた。或時相模守を請待の事があつて、その用意に、煤けたる障子の破を禪尼自身で切張をして居つた。それを當日の周旋をして居た兄の城介義景が見て「こちらへおよこし下さい、某に張らせませう。さような事に馴れたものであります。」と言つた。禪尼はそれを聞いて「その者は私の細工よりもよもや上手なことはありませんまい」と言つてやはり一間づゝ張り替へて居るから義景は更らに「全體を御張換になつた方が大變にしやすい御座いませうまた切張りは斑になつて、見苦しくはあります

まいか」と言つた。すると「私ものちにはさつぱりと張り換へようと思つてゐますが、今日だけは、わざとかうしておかなければならないのであります。そのわけは、すべて、物は破損した所だけを繕つて使ふものだといふことを、若い相模守に見せて、注意をしたい爲であります。」

は、兼好法師の徒然草第八十四段の大意であつて、國定教科書や、大日本史、大日本人名辭書などの「松下禪尼」もこれに原據して居るのであるが、禪尼の此の家庭教育の指導精神と實行とは、賢相時頼をして、感激せしめずには措かなかつたであらう。否、これは、この義景の甘繩邸に於る時頼招待の一席に限られた譯でなく禪尼の此の精神と活模範とは、時頼が禪尼の乳房にすがる幼少時から一貫して居つたのであつて、時頼の人格を築いたことゝ察せらるゝ。時頼が、剛健なる精神を以て、世を憂へ國を思ひ民力の休養に勉めて、しかも自ら持するにかの大佛宣時と一献を汲みかはした時にも、臺所に僅に残つて居つた

味噌を着きかにしてすませた位きように恭けんにして儉けんであつたのも、此の母の感化に依つたのである。吉田兼好も徒然草つれづれ第百八十四段の終りに、

いとありがたかりけり。世を治おさむる道みち儉約けんやくをもととす。女性なれども聖人せいじんの心にかよへり。天下てんかをたもつ程の人を子にもたれける。誠にたゞ人ひとにはあらざりけるとぞ。

と申して居るのは、蓋けだし適評てきひやうと謂いつ可かきである。而してこの恭儉にして質實剛健けんなりし家庭教育は、孫時宗をして、蒙古襲來もうこしゅうらいの一大國難いっだくなんに善處ぜんしよして策を誤あらず、大敵を撃攘げきじやうして功を立て、大に國威を發揚はつやうせしめた事に、又間接の意義を爲して居るのである。

かくて僅に二十餘歳の若き身で、夫時氏ときうぢに死別して寡婦くわふとなつた禪尼も、雄々むむしき勇猛心と聰明そうめいなる識見しきけんとに依つて、其の子を勵まし教育した苦心くしんと努力とは決して徒爾とじではなかつたのである。

#### 四、大楠公の誠忠と夫人久子

##### 1 天下の安危を一身に荷ふ大楠公

昭和十年五月二十五日より四日間にわたつて、湊川神社みなとがわに大楠公六百年祭が行はれた。同年の大日本聯合青年團大會も、特に此の地に開かれて、全國三萬青年の代表者諸君が、公の七生殉國しゆんこく純忠じゆんしゆ至誠しじやうの大精神に、感激を新たにしたのであつた。太平記たいへいき卷三「主上御夢の事附楠が事」には、この誠忠無二せいしゆの公が始めて後醍醐帝ごたごに召し出された様子を叙し、公の大決心を物語つて居る。

元弘元年八月二十七日、主上笠置かさぎへ臨幸成つて、本堂を皇后くわうきよとなさる。始一兩日の程は、武威ぶゐに恐れて、参り仕ふる人一人もなかりけるが、叡山えいざん東坂本の合戦に、六波羅勢はつぱらうち負けぬと聞えければ、當時の衆徒しゆとを始めて、近國の兵ども此彼こゝかしこより馳はせ参る。されども未名ある武士、手勢てせい百騎とも二百騎と

も打せたる大名は一人も参らす。此勢ばかりにては、皇居の警固如何あるべからんと、主上思召し煩はせ給ひて、少し御まどろみありける御夢に、所は紫宸殿の庭前と覺えたる地に、大なる常葉木あり、緑の蔭茂りて、南へ指したる枝、殊に榮え蔓れり。其下に三公百官、位に依つて列座す。南へ向ひたる上座に、御座の疊を高く敷き、未だ座したる人はなし。主上御夢心地に、誰を設けんための座席やらんと、怪しく思召して、立たせ給ひたる處に、鬢結たる童子二人、忽然として來つて、主上の御前に跪き、涙を袖にかけて、一天下の間に暫くも御身を隠さるべき所なし。但しあの樹の陰に、南へ向へる座席あり、是御ために設けたる玉屐にて候へば、暫くこゝに御座候へと申して童子は遙の天に騰り去りぬと御覽じて御夢はやがて覺めにけり。主上是は天の朕に告ぐる所の夢なりと思召して、文字につき御料簡あるに、木に南にと書きたるは楠といふ字なり。其陰に南に向ひて座せよと二人の童子の教

へつるは、朕再び南面の徳を修めて、天下の士を朝せしめんずる處を日月光の示されけるよと自ら夢を合せられて、たのもしくこそ思召されける。夜明ければ、當寺の衆徒、成就房の律師を召され、若し此邊に楠といはるゝ武士やあると、御尋ありければ、近きあたりに左様の名字つきたる者ありとも未承り及ばず候、河内國金剛山の西にこそ楠多聞兵衛正成とて、弓矢取つて名を得たる者は候ふなれ。是は敏達天皇四代の孫井手左大臣橋諸兄公の後胤たりといへども、民間に下りて年久し。其母若かりし時、志賀の毘沙門に百日詣で、夢想を感じて設けたる子にて候ふとて、稚名を多門とは申し候ふなりとぞ答へ申しける。主上さては今夜の夢の告是なりと思召して、聽て是を召せと仰下されければ、藤房卿勅を奉つて、急ぎ楠正成をぞ召されける。勅使宣旨を帶して、楠が館へ行き向ひて、事の仔細を演べられければ、正成弓矢とる身の面目、何事が是に過ぎんと思ひければ、是非の思案にも及ばず

先づ忍びて笠置へぞ参じける。主上萬里小路中納言藤房卿を以て仰せられけるは、東夷征伐の事、正成を憑み思しめさるゝ仔細あつて、勅使を立てらるゝ處に、時刻を移さず馳せ参る條、叡感淺からざる處なり。抑天下草創の事如何なる謀を廻してか、勝つ事を一時に決して泰平を四海に致さるべき、所存を残さず申すべしと、勅定ありければ、正成畏りて申しけるは、東夷近日の大逆、只天の譴を招き候上は、衰亂の弊に乗つて天誅を致されんに、何か仔細か候ふべき。但天下草創の功は、武略と智謀との二ツにて候、若し勢を合せて戦はゞ、六十餘州の兵を集めて武藏相模の兩國に對すとも勝つことを得がたし、若し謀を以て争はゞ、東夷の武力只銳を摧き堅きを破る内を出でず、是欺くに安くして、怖るゝに足らざる所なり。合戦の習にて候へば、一旦の勝負をば必ずしも御覽ぜらるべからず。正成一人未生きてありと聞召され候はゞ、聖運遂に開かるべしと思召され候へと、たのもしげに申して、正

成は河内に歸りにけり。

は、その全文である。さてこゝに掲げたる太平記中の「主上御夢の事附楠の事」を熟讀するものは、何人も「正成一人未生きてありと聞召され候はゞ、聖運遂に開かるべしと思召され候へ」と奏上したる正成の心中を察して、天下の治亂を一身に引き受け、宸襟を安んじ奉らんとする誠忠を感じずには居られないのである。

2 湊川神社寶物大楠公自筆の法華經裏書

更らに、湊川神社の寶物たる大楠公自筆法華經裏書には  
夫法華經者、五時之肝心、一乘之腑藏也、據斯三世之導師、以是此經爲  
出世之本懷、八部冥衆、以是此典爲國之依憑、就中本朝一州圓機純獎、宗  
廟社稷護持感應、僧史所載緯具維綱。爰正成忝仰朝憲、敵對逆徒之  
刻、天下屬靜謐、心事若相協者、每日於當社寶前可轉讀一品之

由、立願先畢、仍新寫ニ一部ニ所レ果ニ宿念ニ如レ件

建武二年八月廿五日

從五位上行左衛門少尉兼河内守橘朝臣正成敬白

とあつて、これは當年大楠公が、至誠國に盡して他なき信條を流露し、宗廟社稷の安危を以て自ら任ずるの志操を表現せる貴き唯一の遺文である。五時の肝心一乘之腑藏也とは、釋迦一代四十五年間の説法は、華嚴、阿含、宵等、般若、法華の五時に分たれるが、その晩年に説ける法華は、一代説法の眞意義を表明して居るから、實に五時の肝心と謂ふべく、佛果に到達すべき大切のものであるとの意。據ニ斯三世之導師、以ニ此經ニ爲ニ出世之本懷ニは、過去現在未來之三世を通じて、衆生救済の導師たる釋迦も、この經に重きを置き、自らこの世に出でたる本懷は、この法華經を説いて、一切衆生を濟度せんためであるとの意。八部冥衆、以ニ此典ニ爲ニ國之依憑ニは、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦等佛法守護の八善神が、この經を以て國家を守護する所の依

りどころとなし、その功德によつて國土の安寧を期したりとの意であつて、以上は法華經の由來とその功德とを述べたものである。「就中」以下は、轉じて我國の事に及んで居る。圓機純契は、圓教の行はるゝ機縁、即ち法華經によつて立てる天臺宗は、克く我國民上下の間に行はるとの意、緯細は書物の意であるから、宗廟社稷護持感應、僧史所レ載緯具ニ緯細ニは、天神地祇もまたこの法華經を護持し感應を垂れ給ふことは、已に僧史に載する所であつて、具さに書物に見えて居るとの意。「爰正成」以下は公がこの經を書寫せし目的を明かにして居つて、即ち所期の如く天下大亂を鎮定することを得ば、その報賽として、本社前の神前に法華經二十八品を一品づゝ毎日轉讀して、神慮を慰め奉らんことをさきに誓願したが、こゝに一部を新寫して宿昔の念願を果せるを感謝すとの意であつて、恐らく公が、紀伊國飯盛山に於る北條餘黨叛擧の際、その討伐の任を帯びて天下の靜謐を立願し、報賽として寫經奉納の誠意を表されたものと察せ



らるゝ。三上文學博士の考證によれば、この公の祈請せられた神社は、石清水八幡宮か、壺井八幡宮か、住吉神社か、將又河内國南河内郡赤坂村建水分神社か未だ分明ならずとの事であるが、公が信念の一端をうかゞひ得ると共に、偉勳の背後には、常に健全牢固たる信條の伴ふを知つて、敬虔の念にうたるゝ次第である。

### 3 久子夫人の内助

大楠公が後醍醐天皇の靈夢により、笠置の行在所に於て有難き繪旨を拜したる元弘元年には、その家庭に久子夫人との間にすでに七歳の正行、五歳の正時三歳の正儀、當歳の正秀の四人の子供があつたのである。久子夫人は、南河内の名族、南江備前守正忠の妹で、大楠公三十歳の時、楠氏の菩提所檜尾山觀心寺の瀧覺坊聖瑜に松尾右馬助季綱の媒介で、元亨三年三月赤阪山の櫻花今盛りといふ時に、婚儀の式典を擧げたのであつて、久子時に芳紀まさに二十。小楠

公の庄五郎正行の生れたのは、その翌年の正中二年六月であつた。彼の法華經を新たに寫して神前に報賽あつた建武二年には、更らに五男新平正平、六男朝成人道淨水も生れて居つて、久子夫人は實に男子ばかり六人の母となつて居つた。

是れより先き笠置にましました後醍醐天皇は、賊の大軍來攻のために、正成の據れる赤坂さして落ちゆきたまひしに、遂に賊兵のためにとらはれて遂に隱岐に遷されたまうた。

忝も十善の天子、玉體を田夫野人の形に替させ給ひて、そことも知らず、迷ひ出させ給ひける御有様こそ淺ましけれ。如何にもして夜の中に赤坂城へと御心計を盡されけれども、假にもいまだ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には息み、二足には立留り、晝は道の傍なる青塚の蔭に御身を隠させ給ひて、寒草の疎なるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野

原の露、分迷はせ給ひて羅敷の御袖を乾あへず、兎角して夜晝三日に山城多賀郡なる有王山の麓まで落させ給ひてけり。藤房季房も、三日まで口中の食を断ちければ、足たゆみ身疲れて、今は如何なる目に遇とも逃ぬべき心地もせざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣・兄弟諸共に現の夢に臥給ふ。梢を拂ふ松の風を、雨の降かと聞召て、木蔭に立寄せ給ひたれば下露のハラ／＼と御袖に懸りけるを、主上御覽ぜられて、

さして行笠置の山を出しよりあめが下には隠家もなし  
藤房卿涙を押へて

いかにせん憑む蔭とて立よれば猶袖ぬらす松の下露

は、その笠置落の御有様を叙したるもので、太平記卷三に見えて居るが、畏しともいと畏き次第である。隠岐にいたり給ふ時には、備前の豪族兒島高德聖駕を播遷の御途に要して、これを迎へ奉らんとして果さなかつたことは、

天莫空三勾 踐一 時非無三范 盡一

と、櫻樹にその赤心をあらはせる勤王美談として世に頌はれ居る。天皇は隠岐の行宮に神器を奉じて時機の到来を待ち給うたが、其の行宮の跡と傳へらる黒木御所の天皇山には、里人は昔から履物を穿いたまま登を畏れ多しとして居り

今上陛下並に大正天皇のなほ東宮にましましたる際、行啓の御野立所もある。かゝる間に、正成は金剛山の險に據り、蕞爾たる千早の孤城に雲霞の如き鎌倉の大勢を引寄せ、あらゆる奇計を以てこれを惱まして、おのづから四方の義氣を鼓舞し、これに乗じて護良親王は吉野より令旨を諸國に發して、勤王の兵を募りたまひ、勤王車の勢やうやく盛となつた所から、天皇六條忠顯らを隨へてひそかに隠岐を遁れ、伯耆に渡りたまひ、その地の豪族名和長年に奉ぜられ船上山の行在所で、義兵を召して東上の策を立てたまうた。此の間に、護良親王、菊池武時、土居通増、得能通増、赤松則村、新田義貞等勤王の諸將各地に

相呼應して、幕府の海内に於ける政權の要地を討滅し、關東の討手として西上せる足利尊氏も俄に歸順して、赤松則村、六條忠顯等と六波羅を陥れ、新田義貞の鎌倉入りにて高時一族東勝寺にて自刃し、鎌倉幕府は全く廢滅に歸した。時に紀元一千九百九十三年元弘三年五月の末方であつた。六波羅陷落の報上聞に達すると、天皇直ちに船上山の行在を發して歸洛の途に就きたまひ、聖駕兵庫に到つてはじめて關東の捷報を聞召し、こゝに奉迎せる正成等先驅として京都に入り給ひ、長く西海の波に御袖を濕ほし給うた帝も、御機嫌いと麗はしく皇宮に還御遊ばされた。この奉迎の一行中には、正成の妹綾江の掣和田正遠も、又久子夫人の兄南江備前守正忠も居つたが、主上御簾を高く卷せて、正成を近く被召、大儀早速の功偏に汝が忠戦にありと仰せ給ふと、正成長りて、是君の聖文神武の徳に不依ば微臣争か尺寸の謀を以て強敵の圍を可出候乎、と功を辭して謙下して、七千餘騎を以て前驅を承つたのである。天皇の御還御は

實に元弘三年六月五日であつたが、かくして建武中興の新政が始まつたのであつて、建武とは、その翌年三月に改元された年號である。

當時かゝる兵馬倥傯の間に處して、久子夫人は愛兒を伴ひて水分の館より觀心等に避難して居つたが、名將の妻として、多數の子供の母として、最善の力を捧げ、その夫をして内顧の憂なからしめ、十分その忠誠を發揚を得しめたと共に、愛兒の家庭教育に遺憾なからしめたその功勞は、歿すべからざるものがある。

## 五、小楠公の誠忠と母堂久子

### 1 楠公父子櫻井の袂別と久子母堂

建武の中興によつて、積年幕府が掌握した政權がはじめて朝廷に返り、再び延喜、天曆の王政に復したが、朝臣の失政、將士の不平などから、公武互に相

きしり、建武二年七月護良親王は鎌倉で弑せられ無念の最後を遂げ給ひ、十月足利尊氏鎌倉に據つて叛き、大義に明かならざる武士之に靡くもの多く、海内鼎沸してまた收拾すべからざるに至り、中興の大業忽ちにして挫折するに至つたのは、惜むべく歎すべき次第であつて、これより五十七年、勤王軍と足利軍と相戦ふ所謂吉野朝時代、南北朝時代となつたのである。

鎌倉に據りて叛旗をひるがへした尊氏は、京都に入りしも正成義貞等に討たれて遙かに九州に敗走したが、多々羅濱邊の戦に一たび菊池武敏を破つてその勢威鎮西を風靡し、海陸の大軍を率ゐて再び東上して來た。主上は正成に命じて義貞と協力して兵庫に敵軍を防がしめんとし給うた。正成はその不利を見抜き、主上叡山に臨幸あらせ給ひ、臣は河内へ罷り下り、尊氏の軍を一旦京に入れて後、義貞と共に之を狭撃せば、必勝確實の旨を奏上したけれども、坊門宰相清忠の反對のために、絶世の名將の智謀も素人の一文臣のために蹂躪せらる

の已むなきに至つた。正成は此上はさのみ異議を言つても詮なしとて、深き決心を以つて兵庫に向つたのである。之を知つた庄五郎の正行は、健氣にも父と共に足利の大軍に當らんと、兵庫行を母に願ふと、賢母久子母堂は、言下に之を諾して急ぎ兵庫に向はしめた。父の許に馳せ参じた庄五郎の正行を、正成は櫻井の宿より思ふ様あつて之を河内に還らしめたのは、彼の有名なる楠公父子櫻井の訣別である。

正成是を最期の合戦と思ければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを思ふ様有とて櫻井宿より河内へ還し遣すとて、庭訓を残けるは、獅子子を生て三日を経る時、數千丈の石壁より是を投、其子獅子の機分あれば、教さる中より跳返して死する事を得すと云へり。況や汝既に十歳に餘りぬ。一言耳にとまらば、我教誠に違ふことなかれ。今度の合戦天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見ん事、是を限と思ふなり。正成既に討死すと聞なば、天下は

必將軍の代に成ぬと心得べし。然りといへども一旦の身命の助らんが爲に多年の忠烈を失ひて、降人に出ること有べからず。一族・若黨の一人にても死残て在ん程は、金剛山の邊に引籠て、敵寄來らば命を養由が矢さきに懸て、義を紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずると。泣々申含めて正成主上より賜はりたる菊水の刀を形見に見よとてとらせける。この有様を見聞く兵互の心を推量して、皆鎧の袖をぞぬらしける。

は、太平記卷十六にあるのであつて、養由は楚の將で矢の名人。紀信は漢の高祖の身がはりとなつて戦死した義臣である。この櫻井驛の址には畏くも明治天皇の御製なる

子わかれの松のしづくに袖ぬれて昔をしのぶ櫻井のさと

の一首を東郷元帥が謹書せられた石碑を始め、乃木將軍の筆になる「楠公父子訣別之所」のいしぶみ、英國公使パークスの「楠公訣兒所」の碑なども建てら

れてある。林羅山は

菊水旗輝櫻井雲

忠臣孝子合還分

最思遺虎擊搏賊

唯願養雛扶翼君

と詠じ、頼山陽も亦

海甸陰風草木腥

史編特筆姓名馨

一腔熱血存餘瀝

分與兒曹灑賊庭

と讚嘆して居る。斯く千載の下人をして感涙に咽ばしむるこの楠公父子櫻井の別れも、賢母久子の方が、愛兒正行をして、父の一大事の場合、遠く兵庫に送りし事が、その背景を爲して居るのである。

櫻井の驛より正行を河内に還らしめた正成は、足利の大軍を湊川に邀撃したが、衆寡敵せず、終日の奮戦勇闘に刀折れ矢盡きて、遂に弟正季等と、七生敵を滅さむを誓ひつゝ、壯烈の忠死を遂げた。時は延元元年五月二十五日、正成行

年四十三。

御醍醐天皇哀悼して已み給はず、正成に正二位左近衛中將を贈らせ給うた。元録五年、水戸の徳川光圀は、湊川に「嗚呼忠臣楠氏之墓」を建て、明治元年四月二十一日、畏くも明治天皇には、勅を下して湊川神社の創建を命じ給ひ、同神社は別格官幣社に列して居る。

あだ浪をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ

は明治三十五年にかしこくも明治天皇の「湊川懷古」の御製であつて、公の七生報國純忠至誠の日本精神は、長しへに皇運を扶翼し奉り、永く國民を指導し國家を擁護する所あるのである。

## 2 父の首級の前慈母の教訓

さて尊氏は、正成の首を觀心寺中院に居る遺族の許に送り越したが、正行もその母も豫てから今日あるを覺悟はして居たものゝ、今親しくその遺骸に接し

ては、悲歎の涙せきあへざりしも察するに餘りある次第である。彼の太平記卷十六にある所の

今年十一歳に成ける帯刀父が首に生たりし時にも似ぬ有様、母が歎のせむ方もなげなる様を見て流るゝ涙を袖に抑へて、持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思て、即妻戸の方より行見れば、父が兵庫へ向ふ時、形見に留めし菊水の刀を右の手にて、拔持て袴の腰を押下げて、自害せむとぞし居たりける。母急ぎ走寄て、正行が小腕に取付で涙を流して申しけるは、梅檀は二葉より芳しといへり。汝幼く共父が子ならば、是程の理に迷ふべしや。小心にも能々事のおさまを思うて見よかし。故判官が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の宿より返し留めし事は、全く跡を弔らはれむ爲に非ず。腹を切れとて残し置しにも非ず。我縦ひ運命盡て、戰場に命を失ふ共、君何くにも御座有と承らば、死残りたらむ一族、若黨共をも扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅して

君を御代にて立參らせよと云置し所なり。其遺言具に聞て、我にも語りし者が、何の程に忘れけるぞや。角ては父が名を失ひはて君の御用にも合參らせむ事有べし共不覺と泣々諫め留て、拔たる刀を奪取れば、正行腹を不二切得禮盤の上より泣倒れ、母と共にぞ歎きける。

其後よりは正行、父の遺言、母の教訓、心に染肝に銘じつゝ、或時は童部共を打倒し、首を取眞似をして是は朝敵の首を取也と云、或時は竹馬に鞭を當て、是は將軍を追懸奉るなんぞと云て、はかなき手ずさみに至るまでも、只此事をのみ業とせる、心の中こそ恐しけれ。

は、よくその事情を明にして居つて、「禮盤」は佛前などにあつて讀經などする時登る臺座。「はかなき手ずさみは」一寸とした遊びを意味して居る。

さてこの時父の首級の前、その信仰の不動尊の前において、慈母の切々の教訓は正行の心肝に強く響いて、やがて楠家三代の忠烈に光彩あらしめたのである。

る。

### 3 父の遺訓母の教訓實現

正行長じて後醍醐帝に忠誠を致し、帝は父正成の遺勳をも思召され、正行を正四位下に叙し帶刀と爲し給ひ、更らに父の官を襲いで檢非違使左衛門尉に任じ河内守を兼ねしめ給うた。天皇吉野の行宮にて、かしこくも「玉骨は縦南山の苔に埋るとも魂魄は常に北關の天を望んと思ふ云々」の悲痛なる御遺詔を留め、左御手に法華經の五卷を持せ給ひ、右の御手には御劍を按じて延元四年八月十六日丑刻に崩御あらせ給ひし後は、南軍ます／＼振はざりしも、正行等楠氏一族の誠忠は、屢々賊軍を破る所あつた。尊氏深く之を懼れて、高師直師泰に兵六萬を發して來り攻めしむる所あつた。正行は吉野皇居に參内、四條中納言隆資卿を以て作戰計畫を奏上し、後村上天皇は畏くも拜謁を賜り、且「朕汝を以て股肱とす」の有難き御沙汰さへあつたが、正行は之を最後の參内と思ひ

定めて退出の上、如意輪堂の壁板に二百有餘の將士の氏名を書き連ねて、その奥に

返らじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞ留むる

と、一首の歌を書留め、逆修の意味にて各鬢の髪を剪つて佛殿に投入、吉野を出で、敵陣に向ひ、正平三年正月五日の未明より四條堰に於て激戦は開始されたが、朝來午後四時まで戦ふこと三十餘合、今は正行・正時も矢を受くること蟬の如く、兵皆重創して起つ能はず、正行聲を勵まして、「嗟我事終れり賊の爲めに獲らるゝ勿れ」と、言ひ畢りて弟正時と交刺して壯烈の最後を遂げ、相従ふの義士三十餘人も、悉く腹掻き切つて殉じたのであつた。正行時に年二十有三。かくして期待せられた王業回復戦は、一旦の頓挫に終つて、二葉より芳しかつた梅檀は、惜くもこゝに枯れ果てたけれども、其の芳香は馥郁として永く盡きないのである。明治の聖代になつて、十年に従三位、三十年四月に従二位

を贈られ、正行を祀れる四條堰神社は、別格官幣社に列せられた。

#### 4 淨く澄める家庭の感化

とても世にながらふべくもあらぬ身の假の契りをいかで結ばん

は、正行の最後に一段の光彩を添へた辨内侍に關する詠である。内侍は、元弘の難に殉じた忠臣右少辨日野俊基の女である。「落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦を衣て歸、嵐の山の秋の暮」の俊基東下りは、太平記中の名文である。彼女は吉野の皇居に宮仕へして居つたが、高帥直に誘惑されて危難に遇はんとした際、偶然正行が之を救ひ出したので、後村上天皇も「正行なかりせばいと口惜しからましをよくこそ計ひつれ」と御褒め遊ばされて、内侍を正行に賜はんと勅ありしとき、正行はかりの契りをいかで結ばんと拜辭した佳話は「吉野拾遺」に見えて居るのである。内侍は、正行を追慕の情已み難く、遂に尼となつて龍門の里なる龍門寺に入り、終生正行の後世を弔つたとの事



ある。今如意輪寺の境内南側にある「至情塚」は、内侍が至情を憫んで後人の建てたものである。

さても、小楠公をして父の遺訓、母の教訓を實現せしめ、實に忠孝兩全の士たらしめたのも、實に賢母久子の方の力の與つて大なるものが存するのである。その辨内侍に關する挿話は、又正行が情に移らず一意君國に盡す誠忠に專念して居つたと共に、女性の貞操を重んじ、その人格を尊重したことをも物語るものであつて、その正行を生み正行を育てた淨く澄める家庭の慈母の感化をそとろに奥床しく感ぜらるゝのである。

かく良妻にして賢母であつた久子母堂は、正行の戦死後落飾して法衣を着け敗鏡尼と稱へて甘南備峰條山の觀音堂に入り、朝夕念佛三昧、只管皇運の恢復を祈り奉り、懇ろに楠氏一族の菩提を弔ひ、正平十九年七月十七日六十一歳を以て歿した。

「楠妣庵玉山蒲園大禪定尼」は、その謚である。

○詠 史（松下禪尼）

時頼の母にして又時宗を孫に持ちたる人に榮あり

○詠 史（楠久子）

七たびも生れて君を護るてふ楠公の妻帯刀の母

## 乳母春日局と乳人淺岡

### 一、乳母によりて婦道の躍進

鎌倉室町時代を経て發達し來つた武士道は、戰國時代に入つて一層其の精彩を加へ、武勇、廉恥、質實、儉素、忠誠の諸徳が、武人の生命とされて居つた際、之が婦女子の間にも反映して婦道の振作となり、夫のため家名のため主君のために、あらゆる犠牲を顧みなかつたのである。而して之が徳川時代に存続して、しかも乳母を通じてその精神の躍進を見たのである。

抑も乳母は、生母に代りて初生兒を哺育するを職分としたので、其の由て來る所甚だ古く、世界の民族を通じて弘く行はれ居るのであるが、日本書紀には、豊玉姫の鵜鷓草葺不合尊を産み給ひ、海を涉つて去られますと、父彦火々出見

尊は、婦人を取り給ひて、乳母湯母とせられたことが見えて居るから、我國では既に神代の昔にも乳母の事があつたのである。中世以後となつて、京都縉紳の家では、其の幼兒の健康のために、之を邊鄙の農家に托して哺育せしむる風が生じて、かゝる農家を「さと」と稱し、其乳母は自分の兒と共に預りたる兒を哺育した處から「乳兄弟」なる稱も出て、その乳母の實子を「めのと」と云つた。武家時代諸家の盛衰興亡激甚を極めた頃には、乳母は其の幼主の榮枯浮沈も、己が小さき乳首に繋つて居る如き責任を覺えて、懸命の働きをしたのである。徳川三代將軍家光の乳母春日局、淨瑠璃で名高い千代萩の政岡の淺岡の如きは其の代表である。

### 二、家光擁護の乳母春日局

#### 1 稻葉正成の妻女お福

皇紀二千二百三十九年の天正七年に、明智光秀の將齊藤内藏助利三を父とし、稻葉刑部少輔道明の女おあんを母として、丹波國の片田舎に花の如き女子が生れた。その名をお福と呼んだが、これぞ後の春日局である。天正十年本能寺の變があつて、父利三が之に死し、父の伯母が土佐の長曾我部元親の室となつて居つた處から、四歳のお福が母に伴はれて土佐に遁れ、長曾我部氏の庇護の下に懇切なる教育を受けた。長じて元親の幹旋で、小早川金吾秀秋の浪人稻葉佐渡守正成に嫁し、長男丹後守正勝、二男七之丞正定、三男内記正利の三兒を擧げた。慶長九年七月十七日、家光の竹千代君が生れて乳母を求めた時、京都所司代板倉周防守に見出され、正成とは合意上の離婚をして、三兒を伴ひて江戸に赴きその任に就いたのである。正成との離婚の原因については、不和合説や嫉妬説や、浪人生活の貧に堪へなかつた説など様々の臆説があるけれども、天晴れ三代將軍となるべき竹千代君のために誠忠を捧げ、一は父利三の賊臣の汚

名を雪ぎ、一は夫並びに愛兒の將來にも榮光あらしめたいと云ふ純なる動機から、夫正成に相談してその同意を得たのが事實の様である。明治二十一年四月福地櫻痴の原作演劇「春日局」には、福女の關東に下るを夫正成に相談したる時の夫婦の問答に

(福) 夫に離れ子に別れ三十路に餘る身を以て、宮仕いたすのは好ましからぬ事ながら、心を定めて御請をいたしましたは、第一に三代の天下を知し召す若君守立て申すは一家の譽一身の面目、又二つには其縁で子供たちが身の出世にも成らうかと存じまする故、東の路は遠くとも、何の厭ひ申すべき、一人かの地へ赴きて、他事なく奉公相勤め、流石は佐渡守が妻、内藏助が娘ぞと心ある人々に言はれたう御座ります。

(稻) オ、天晴の決心よ、昨夜御奉公の一條を承はつた其時に、勸め度は思ひしが、今浪人の身となつて賤の住居に暮せども、誰に心を置もせず思ふ儘

なる境界の心安きに引かえて、苦勞に苦勞を重ねべき宮仕をば致せよと、夫の口から言ひ兼ねて御身の心任せとは申たりしに、いみじうも決心ありしは、流石々々、御身が爲にも子供等が爲にも上なき身の仕合、佐渡も共に祝着いたす。

とあつて、これが、明治二十四年六月に始めて東京歌舞伎座に上演され、九代目市川團十郎が春日局を勤めたのであつたが、勿論演劇は史實そのまゝでなく當時福女は二十六歳であつたのを、三十路にあまるなどあるけれども、少くも當時兩人の心境は、之に當らずとも遠からざるものであつたと思はれる。さてかゝる決心を以てこの大任に當つた福女は、果してその使命を果したであらうか、如何に活躍したであらうか。

## 2 秀忠夫妻の誤れる家庭教育を是正

江戸城の大奥に入つて、徳川三代將軍たるべき竹千代の君の乳母となつた福

女は、自分の乳房によつて竹千代君のムク／＼と健やかに發育生長するを何よりの喜びとした。かくて、竹千代君三歳の慶長十一年五月七日に、弟國松（後の駿河大納言忠長）が誕生して、こゝに福女の忠節試練の一石が投ぜられた。竹千代も國松も共に秀忠將軍夫人の實子である。夫人崇源院淺岡氏は、淀君の妹、淺井長政の第三女、その母は織田信長の妹であつて、淀君に劣らぬ才色二つながら備つて居り、秀忠は同夫人を畏愛して居つた。この夫人は何故か國松のみを愛して竹千代を疎んじた。公正の法則は社會生活にも一國の政治にも極めて大切であるが、家庭に於ても之を無視するとき、幾多の御家騒動や悲劇を産むのである。而して秀忠夫人は、親としてこの公正の原則に悖る國松偏愛を敢て爲し、秀忠も之に搖き込まれて、遂に竹千代を措いて國松を三代將軍にしようとする様子さへあつた。權勢に阿附する近侍のもの共は、女中に至るまで、國松のみを尊敬して竹千代を輕んずる様になつた。國松も圖に乗つて、兄

をないがしろにする吾儘振りが日に増長した。此のまゝに推移したらば、江戸城の礎に如何なる龜裂を生ずるやも計り難い情勢であるので、福女はその對策に女の小さき胸を日夜痛むるのみであつた。思ひあまつて、今は家康に内訴して解決を請ふより途なしと決心したる福女は、伊勢大神宮參拜を名として旅程に上り、駿府(靜岡)に至つて具さに事情を家康に開陳した所、家康は「此天下の大事なり」と言つて、早速鷹狩に托して江戸城に入り、秀忠夫妻の心得の足らざるを諷刺し、國松を抑へ、竹千代を稱揚して「竹千代十五歳にもなりたらんには、余は之を連れて上洛し、三代將軍の名を披露すべし」と明言したので、こゝに嫡庶の分が定まつて、不公平なる家庭教育も公正に歸することが出來て、元和九年には、竹千代の君は三代將軍家光となつて、江戸幕府三百年の基礎を堅めた名君となつたのである。一方幼少より常道を逸して、兄を凌ぎ、自分のみ父母の愛を専らにしたる國松は、その吾儘が彼の性格を變質的に陥らしめ、

加ふるに將軍の野望も充たし得ざりし不平も手傳つて、元和九年甲斐、駿河、遠江三國の太守となり、次いで大納言に任じ五十五萬石の封邑を有し、寧ろ破格の優遇を受けても之に満足すること出來ず、自暴自棄的の狂暴の所行多かつたので、その年の十二月六日に、享年二十八歳を以て切腹せしめられて居る。

徳富蘇峯翁はその名著近世日本國民史中に

大名に於ては二男以下は臣下だ。貴きものは只だ相續者のみだ。然るに此の臣下たる可き一人が、相續者と相下らざるが如きに於ては、面倒の生ずるの自然の勢と云はねばならぬ。忠長は自から禍の至るに氣付ずして、斯る態度に出でたるは、彼の年少氣銳の致す所なれば、詮方なしとするも、彼をして騎虎の勢ひ、此に至らしめたのは彼の父母だ。特に彼の母だ。切言すれば忠長を殺したものは、家光でなく、寧ろ其の母崇源院夫人だ。即ち彼女は家光の手を籍りて忠長を殺したのだ。

と、論斷ろんだんされて居る。もし春日局かすがのつばねなかつたらば、崇源院夫人は家光の運命うんめいをも暗黒あんくわくならしめたであらう。恐るべきは婦人の盲愛もうあい、慎むべきは家庭教育の不正である。

### 3 局の功勞の餘慶

家光將軍となるに及んで、福女ふくぢよを遇すること益々厚く、母淺井氏の死後しごは、大奥の事を福女に總べしめ、江戸大奥の制は、専ら福女の定めたものである。嘗かつて家光痘とうを患わづらつて重かつた時、彼女は生涯醫藥を攝らぬことを宗廟そうぼうの靈に誓つてその全快ぜんくわいを祈つた。寛文六年には、公武間の調停てうていとも云ふべき大任を帯びて京都に入り、畏くも後水尾天皇に拜謁はいえつ、御盃を賜はり從三位に叙し春日局の號を賜はつた。晩年ばんねん從二位にすゝんだが、寛永二十年八月病篤びやくく、大奥を退き代官町だいくわんまちの自邸で療養中、家光親しく藥を進めると、かねての祈誓きせいがあるので之を押しいたゞきつゝも舌を以て咽のどをふさぎ、頃うらより懷ふところに流し入れて一滴も腹

中に入れず、君に禮れいをつくし、かつ神の誓ちかひを破らなかつたといふ。同年九月十四日遂に六十五歳を以て大往生だいわうじやうを遂げ、麟祥院殿仁淵りんしやういん了義大姉と諡して湯島の麟祥院りんしやういんに厚く葬つた。

さても此の乳母春日局の忠誠と功勞は酬むかひらるゝに、獨り局の家光大成たいせいの素志しよくわんてう貫徹並びに局の厚遇かうぐうされたのみに止まらず、夫正成は寛永四年下野國眞岡城二萬石を得、長子正勝は家光に重く用ひられ、父正成の歿後ぼつごは其の領地二萬石を相續さうぞくし、後六萬石加増せられて八萬五千石の小田原藩主おだわらはんしゆとなり、その子孫は淀藩主よどはんしゆとなつて、安房館山藩主はその分家であり、兩家とも現に子爵に列して榮えて居る。二男正定は尾張侯義直に仕へたるも後つぎを詳まづかにせず。三男正利は駿河大納言忠長に仕へ、その驕態けうたいの感化かんくわを受けたるか、忠誠に欠くる所あつて、局は之を放逐はうしゆくし親子の對面たいめんを許さなかつた。家光は自分と乳兄弟ちゅうきやうだいの故を以て之を許さんことを局の病床について説いたけれども、局は「こは御説ごせつとも覺え侍

らず、正利不忠を以て老妾の愛を裂き放ちしもの、妾死すと雖も子を愛して君を後にせむや、殿下もし彼の罪をゆるして召し用ゐ給はゞ、老妾怨を黄泉の下に抱かむのみ。將軍となりて天下の政を行はせらるゝに私恩を以て公を傷け玉はるな。」と臨終の際までも、大義の前には私情を殺して顧みなかつたので、當時の乳母氣質を察することが出来る。まことに先きに別れし正成の出世も、淀館山、兩子爵家の繁榮も、また局の功勞の餘慶と謂ふ可きである。

### 三、綱村擁護の乳人淺岡

#### 1 東京目黒正覺寺政岡の銅像と

#### 仙臺孝勝寺政岡の墓

昭和九年十月十七日に東京目黒の正覺寺で、政岡の銅像の除幕式があつた。像は名優尾上梅幸の政岡の舞臺姿をモデルとして、彫塑界の權威北村西望、建

畠大夢、新田勝太郎三氏の手で製作されたもので、伊達綱村の生母三澤初子の後裔である伊達興宗伯令嬢登美子さん（五歳）の可愛い手で、紅白の幕は靜かに除けられ、式後かの國定國語讀本中の水兵の母中の一大尉である小笠原海軍中將の講演があつた。この正覺寺には、三澤初子の兩親の墓があり、又初子の法名年月日を刻める五輪塔があつて、これを政岡の墓と傳へて居る。加茂眞淵の目黒紀行にも、眞淵が此の寺に参りその墓に詣で、「寛文の頃仙臺中將の息龜千代君をもまゐらせて、ちよの艱難を経て、遂にいさをしをあらはしたる局なりけりと思ふに

百代世はふれども君がいさをしのくちぬしるしの石にこそありけれ」

など書いて居る。しかし、初子は貞享三年二月四日、四十七歳で品川邸に病歿仙臺に歸葬し同二十七日同地の孝勝寺に葬つて居るから、この正覺寺の五輪塔は初子の菩提のために建てたものであらう。さて仙臺に行つて政岡の墓を尋ぬ

ると、孝勝寺にありとの答へを得る。その孝勝寺へ詣ると「三澤初子の墓」と刻める石碑があつて、絶えず参拜者による新しき花新らしき香が手向けられて居るのを認める。

そもくこの政岡は、伽羅先代萩によつて、純忠の乳母として、又母性愛豊かなる聰明の賢母として、深く強く國民の心裡に徹して居るが、その史實は果して如何、稗史には政岡を伊達安藝の妹淺岡なりと云ふも、以下藩翰譜、伊達騷動實録、淨瑠璃先代萩等によつて、その真相を明かにしよう。

## 2 伊達騷動と先代萩

徳川四代將軍家綱の時代に、仙臺の城主伊達家に起つた御家騷動を世に寛文事件、又伊達騷動或は仙臺騷動といふ。藩祖伊達政宗の家督は、次子忠宗が嗣ぎ、更らにその子綱宗が後を襲いだのは萬治元年九月の十九歳の時であつたが、政宗の末子で綱宗の叔父に當る兵部宗勝は、國政を擅にせんとする陰謀から、

ひそかに綱宗を酒色に溺れしめ、それを口實に隱居せしめた。時に綱宗の側室三澤初子の生める當時二歳の龜千代丸が家督相續する事になつて、宗勝は之が後見となつたが、家老原田甲斐宗輔、小姓頭渡邊金兵衛義俊、目付今村善太夫安長などの奸曲の人々を採用して、濫賞酷罰。家督を狙ふはだての噂さへ立つて、幼君の身邊頗る危険を感じらる折しも寛文六年十一月二十七日には、龜千代の膳部の料理を試食した近臣が、悶死した置毒の怪事件が起つた。宗勝は之を調査吟味せずに、醫師河野道圓父子を殺し、奥方女中榊田鳥羽を退けた。時の人達は、宗勝が龜千代を毒殺して己が子東市正宗興を其の後に立てんとするのために、道圓に命じて膳部に毒薬を投ぜしめたるを、露顯したから道圓父子を殺したのであらうなど、話し合つた。一門の伊達安藝宗重は、深くこの悪政を心配して、屢々宗勝を諫めたが用ひられず、遂に寛文十一年二月、安藝は自己の領分の境界争ひを幕府へ訴へた機會に、兵部宗勝と甲斐宗輔の私曲、藩の



悪政をも訴ふる所あつた。茲に於て、老中板倉内膳正重矩の宅にて、關係者を  
糺問あり、三月二十七日大老酒井雅樂頭忠清の邸にて對決となつて、結局原田  
甲斐等の罪科に行はれることになつたが、控室で甲斐は突如安藝に斬り付けて  
之を殺し、甲斐は次の間から抱き止めに出了蜂谷六左衛門に殺されて了つた。  
かくて四月三日斷罪あつて、兵部宗勝は土佐國へ流され土佐守豊昌に預けられ  
子息市正宗興は豊前の國へ流され小笠原遠江守長眞に預けられ、原田が子息等  
並一族の輩悉く誅せられた。

以上はその伊達騒動の大略であるが、三澤初子には龜千代丸の外に二男鶴千  
代丸の美作守村和、三男辨之助遠江守宗齋もあつて、現伊達伯爵家は長子龜千  
代丸綱村の後裔、現伊達侯爵家は辨之助宗齋の後裔であつて、次子鶴千代丸村  
和の後も、柴田川崎で二千石を領して居つた。初子は漸く二歳でかゝる暗雲低  
迷裡に家督を嗣いだ幼君龜千代丸を擁護するために、側近の忠臣等と共に少な

からぬ苦心努力を拂つたのである。彼の仙臺躑躅ヶ岡の釋迦堂は、初子が梅檀  
を以て釋迦の像を作つて之を龕中に納め、綱村の無事安泰を祈つたものを、事  
定まつて後之を綱村に與へ、堂を建て、安置せしめた機縁によつて、元祿八年  
二月に綱村の建立したものである。

所謂先代萩は、是等を戯曲化して、當時婦道の粹たる乳母氣質を高潮したも  
のである。この外講談にも戯曲にも數多く世上に喧傳されて、その戯曲だけで  
も、大鳥毛五十四郡、伽羅先代萩、伊達競阿國戲場、姿花江戸伊達染、慙紅葉  
汗顔見也、歸曲輪花伊達染、萬歲阿國歌舞伎、當館扇伊達寫繪、早苗鳥伊達聞  
書、烈女初子、伊達安藝盡忠錄等の十一種もあつて、今日行はれて居る先代萩  
は、其の劇中の人物の姓名の如きも「伊達競」と「先代萩」と混じ合つて居る。  
其の本名と假託名とを對照すれば。

本名

假託名

伊達綱宗

足利左金吾頼兼

同 龜千代丸

伊達鶴喜代丸

伊達兵部少輔宗勝

大江圖幸鬼貫

伊達安藝宗重

伊達次郎明衡

原田甲斐宗輔

仁木彈正衛教將

渡邊金兵衛

渡會銀兵衛

河野道圓

大場道益

酒井雅樂頭忠清

梶原平三郎景時

板倉内膳正重矩

細川勝元

乳母政岡

荒獅子男之助重助

であつて、「伊達競」には、乳母政岡を井筒月筒に、早苗鳥伊達聞書には、淺岡

として居る。今その先代萩の筋の大要を見るに「足利左金頼兼は、江戸参観の砌、吉原の傾城高尾太夫を戀し、その色香に溺れてお家を顧みないのに乗じて奸臣大江鬼貫、仁木彈正、渡邊銀兵衛等へは、公儀への聞えもありと稱して主君を無理に隠居させ、幼君一人のお家横領を企てる。一味にはその他に梶原の奥方榮御前、銀兵衛の女房八汐、大場道益、女房小巻があり、幼君鶴喜代君擁護の側には、伊達明衡、荒獅子男之助等の忠臣と共に、男まさりの乳人政岡があつて、之を守護して居る。幼君毒害の恐れある所から政岡は御殿で自ら飯を炊くほど用心して居る所へ、腹に一物ある梶原の妻榮御前は、頼朝公よりの下され物とて菓子を持参するを、豫ねてのいひつけで政岡の一子千松は、走り出でそれを取つて食べると見る間に毒が廻つて苦しみ出す。企みを見せじと八汐は千松を懐劍で鬪り殺しにしたが、ぢつと觀念して涙一滴落さぬ政岡の態度に小巻は榮御前に、この千松は鶴喜代君の替子とさゝやき、榮御前も之を信じ政

岡を同腹中と見誤る。遂に家督相續の訴訟は、伊達明衡と仁木彈正との對決となつて、細川勝元の明斷で明衡方の勝となり、奸臣等は誅に伏す」となつて居る。而して先代萩の淨瑠璃を聞いて演劇を見ても、何人も特に感涙を禁じ得ないのは、三幕目足利家奥御殿政岡忠義の段である。

鶴喜代君の食事は、毒藥の懸念から、政岡自ら飯を焚いて、我が子千松に見をさせた上、進める事になつて居つたが、その飯の時間が遅れた時、あどけない鶴喜代が「やい乳母ひもじいと云ふ事は、強い武士の言はぬ事と常々そちが言ふた故、俺は言はねどさつきから、空腹になつたわい」と言ひ千松も涙聲にて「武士の子はお腹が空いてもひもじうない」などいぢらしくも我慢をするといふ有様に、政岡は忍びなきつゝ飯焚きをして、漸やく炊事が整つて、二人はあれもう飯ぢやと悦ぶ際、梶原の妻榮御前は沖の井、八汐を従へて見舞に來り、美しい菓子折を若君に進めますのを政岡は之を拒むと、「頼

朝公より下さる御菓子、何疑うて頂戴させぬ。是非此榮がたべさせる」と。迫る。政岡が返答に窮する刹那、千松が走り出で、菓子をつ喰べ残りを足蹴にする。忽ち千松は毒が廻つて苦しみ出したのを、素破惡事露禰と八汐は千松を捕へて懷劑で咽喉を一突にして、政岡の前で鬪り殺しにするのを、「慮外者の千松の成敗は、御家の爲め」と言つて政岡は一滴の涙も見せない。この様子に小巻は榮御前にこの千松は鶴喜代君の替子とさゝやき、榮御前も之を信じ、一同を遠ざけて「人の噂の如く我子千松を鶴喜代に又鶴喜代を千松に仕立て置き、今死んだのは眞の鶴喜代ならん」と惡人一味の連判狀を渡して、政岡を惡人の一味と背いて安堵して歸る」

それからである。

あとには一人政岡が、奥元親ひく／＼て、我子の死骸いだき上、こたへこたへし悲しさを、一度にわつと溜涙、せき入せき上歎きしが、「コレ千松よう死ん

でくれた、出かしたなく、そなたが命捨たゆゑ、邪智深い榮御前、取替子と思ひ違へ、巳がたくみを打明しは、親子の者が忠心を、神や佛も哀みて鶴喜代君の御武運を守せ給ふか。ハ、く有難やく、是といふのも此母が、常々教へて置た事、稚心に聞きわけて、手詰に成つた毒害を、よう試みてたもつたのふ、ヲ、出かしやつたくそなたの命は、出羽奥州五十四郡の一家中、所存のほぞを堅めさす、誠に國の礎ぞや。

とは言ふ物の可愛やな。君の御爲かねてより、覺悟は極めて居ながらも、せめて人らしい者の手にかゝつても死ぬ事か、素性賤しい銀兵衛が、女房連の劍にかゝり、なぶり殺を現在に、傍に見て居る母が氣は、どの様に有ふ、どう有ふ。思ひ廻せば此程から、唄うた歌に千松が、七つ八つから金山へ一年待て共まだ見えぬ、二年待て共まだ見えぬと。歌の中なる千松は、待つかひ有つて父母に、顔をば見せる事も有う。同じ名の付く千松の、そなたは百年

待つた迎、千年萬年待つた迎、何の便りが有ぞいの。三千世界に子を持つた親の心は皆一つ、子の可愛さに毒な物食ふたと云つて聞かすのに、毒と見えたら試みて、死んでくれいと云ふ様な、胴慾非道の母親が、又と一人有物か。武士の種に生れたは、果報か因果かいぢらしや。死ぬるを忠義といふ事は、いつの世からのならわしぞと、こりかたまりし鐵石心、流石女の愚にかへり、人目なければ伏まるび、死骸にひしと抱き付き、前後不覺に歎きしはことわり過て道理なり。

此の處は、幾度聞いても幾度觀ても、常に新しき刺激と感動とを覺えてハンカチーフを濕はさないものはないのである。

### 3 純忠義烈と母性愛の禮讚

さてもこの先代萩は、伊達騒動の事件や、置毒の問題や、三澤初子等の苦心などをモデルとして、作り出されたものであつて、史實と超史實との立場に

立て居るのである。此の政岡の淺岡を伊達安藝宗重の妹で其の子は千松であるなどの説も、大概文彦博士の伊達騒動實録中の伊達氏系譜によれば、成程安藝宗重には母黒木氏を同うする妹一人あつたけれども、これは後藤新平伯や齋藤實子を出せる水澤藩の伊達和泉宗直の室となつて、宗景を生んで居り、その宗景は、延寶三年三月十四日に二十六歳で亡くなつて居つて、龜千代丸の大奥に仕へた事がないのであるから、安藝の忠節に單に結び付けんとした誤傳である。

翻つて考ふるに、仙臺孝勝寺「三澤初子之墓」が政岡の墓として香華絶えずその五輪の塔のある目黒正覺寺に政岡の銅像が建てられ、又淨瑠璃先代萩のラヂオ放送には幾百萬聴取者の注意が集注せられ、さては演劇先代萩上演に觀衆の大入満員なる所以も、みな輝ける忠誠正義の勝利を禮讚し、涙ぐましき母性愛を感嘆する美しき人情の發露、貴き國民精神の顯現と謂つ可きである。

○詠 史（春日局）

館山や淀の子爵も竹千代の君大成の餘慶なりけり

○詠 史（政岡）

母の愛国の忠誠を伽羅の先代萩に見るぞうれしき

## 加賀の千代女

### 一、庶民階級の生める才女

元祿時代は、俳諧・小説に浄瑠璃・芝居に、はた裝飾畫に浮世繪に、いづれも平民的趣味を發揮して、民衆文藝の大成した時代である。家康以後歴代の將軍は、相ついで學問に勵んだが、特に五代將軍綱吉は、學を好みしばしば獎學の令を發し、みづから經書を城中に講じて諸侯・士大夫等をしてこれを聽聞せしめた程である。又湯島聖堂を造り、林羅山(道春)の孫信篤(鳳岡)を大學頭に任じて祭祀を掌らしめ、綱吉みづから臨みて釋奠の禮を擧げた。後林家代々大學頭に任じて文教を總轄し、春秋の兩度釋奠を擧げ、學生をして文武兩道を兼修せしめた。これが幕末まで二百餘年も續いて江戸學問所又昌平學とも呼び、

こゝに於て全國諸藩も、またこれにならつて各々藩學を起し、藩士の子弟をして文武兩道を勵ましめた。中江藤樹、熊澤蕃山、伊藤仁齋、伊藤東涯、荻生徂徠、太宰春臺、服部南郭、木下順庵、新井白石、室鳩巢、貝原益軒、保井算哲、關孝和、山鹿素行等の學者が輩出して士分の教育の隆盛を見たと共に、庶民の教育機關として寺子屋は津々浦々に至るまでしだいに擴まつて、平民の子女は、手習師匠に就いて讀書き算盤など日用必須の實學を修め、石田梅巖の唱導せる卑近切實なる心學道話によつて、日常の道德を學び處世の途を教へらるゝ所あつた。

井原西鶴は、元祿時代の人情世態を如實に描寫したる多くの小説を著し、近松門左衛門(巢林子)は、浄瑠璃語り竹本義太夫のために筆を執つて巧みに世の義理人情を寫し、國性爺合戦、會我會稽山、假名手本忠臣藏などの傑作は、普く山村僻邑にも普及して、三味線に合せてこの浄瑠璃を語り、操人形を舞はし

などする所から、興趣のうち忠孝情義を子女に教ふる所あつた。又京阪及び江戸に於て、歌舞技芝居も廣く民衆の嗜好に合し、名優東西に輩出して、淨瑠璃と共に當代民衆娛樂の變遷を爲して居つた。彼の社寺殿舎に靈腕を振つた狩野探幽守信、土佐家中興の土佐光起、裝飾畫の本阿彌光悦、俵屋宗達、模様畫の尾形光琳、浮世繪の菱川師宣等の名畫伯の出たのもこの時代であつて、これらの繪畫は、更に美麗なる版畫となつて民衆の間に弘通愛賞された。もし夫れ俳諧に至つては、慶長頃より寛文頃までは全盛であつた松永貞徳のやさしくおもしろき古風が、延寶頃から奇警輕快なる句法に滑稽味を加へたる西山宗因の談林風が起つて之を退けたが、この時代になつて宗因の門人に松尾芭蕉が出た。芭蕉は、皇紀二千三百四年後光明天皇正保元年に伊賀上野(又曰拓植)に生れ、元祿七年十月十二日に歿して居るが、名は甚七郎、少年にして城代藤堂新七郎家に仕へ、良忠(俳號禪吟)の扈從となり、當時すでに宗房と號して句作を

試み、北村季吟の加筆を受けて居つた。主君良忠早世した處から遁世の志を發し、寛文十二年伊賀を出で、江戸に下り、初めは關口の水道工事に職を奉じて居つたが、門人鯉屋杉風の後援によつて、深川六間堀に芭蕉庵を得て芭蕉庵桃青と號し、西行の風を慕つて一簑一笠四方を周遊し、自然を友として吟詠をほしいままにした。當時江戸の俳壇には、貞徳の古風も、宗因の談林派も共に行はれて居たが、彼は寧ろ檀林の新しさを愛した方だけでも、檀林のいたづらに奇警であつて、眞實なきことにあきたらずとして、遠く萬葉の自然を魂として近代の生活を取入れる一風を創始した。こゝに於て、俳句は從來の滑稽味を脱して、幽寂の詩趣あふれ、まさに當時の文學界に一新生面を聞き門弟全國に遍く、この流は獨り海内を風靡し、今日なほその精神が俳壇に活躍して居る。榎本其角、服部嵐雪、向井去來、内藤文章、森川許六、各務支考、立花北枝、杉山杉風、志田野坡、越智越人などは、門弟中の秀才で、世に之を蕉門の十哲と

呼んで居る。

さて、かくの如く文教大に興隆して庶民にまで普及した時代では、丹波の山中の柏原から六歳で「雪の朝二の字二の字の下駄のあと」を詠んだ貞閑尼捨女が出で、伊勢の坂より、芭蕉翁の訪問を受けて「時雨てや花まで残る檜笠」と詠じた園女が出で、江戸堀江町の菓子屋から十三歳で「井戸端の櫻あぶなし酒の酔」を詠じた秋色女を出し、江州大津からは芭蕉翁の遺骸の淨衣を裁縫して「山櫻ちるや小川の水ぐるま」の秀句ある智月尼が出て居るなど、何れも庶民階級の家庭の産んだものであつて、平安朝の才媛は、多く貴族社會の出であるのに比して、著しき對比と云ふべきである。而して加賀の片田舎の表具屋の娘に生れて、名聲後の世に永く芳しき加賀千代女は、またこの時代に於る庶民階級の生める才女であつたのである。

## 二、恵まれたる彼女の環境

### 1 七歳の名吟

加賀の千代は、松尾芭蕉の歿した元禄七年より八年後の元禄十五年二月、加賀國金澤を去る三里南の松任なる片田舎に、表具師六左衛門を父とし、同地村井屋より嫁し來つたつる女を母として呱呱の聲を擧げたのである。此の年の十二月には、赤穂義士の討入りが行はれ、又之れより九年前の同六年八月には、井原西鶴、四年前の同十一年には捨女等が夫々故人となつて居る。彼女が三歳の時には内藤丈草、四歳の時には北村季吟、五歳の時には智月尼、六歳の時には榎本其角、服部嵐雪が亡くなつて居るが、七歳の時には子供等と夕暮街に遊戯して居つた時、偶々雁の空を鳴き渡るを見聞して「初雁やならべて聞くは惜しいこと」を詠み出で、父六左衛門が之を松任の町の聖興寺の住持柳松院師に話して「これは立派な句ぢや」と褒められ「今に大きくなつたら偉い俳人にな



るだらう」との評判は、狭い松任の町に行き渡つたそうである。

## 2 女中奉公も俳人の家

かくて寺子屋に讀書習字算盤を學んで居つた彼女は、十一歳の時から約四年間女中奉公に出た。北陸地方の風習とて、中流處の家庭では、その女の修養のために他人の飯を食はせて世態人情を體驗せしむると共に、行儀作法や家事裁縫文筆などの見習をさせることが行はれて居つたから、彼女の女中奉公もあながち家庭の生活窮迫のためではなかつたのであらう。彼女の勤先は本吉（今の美川町）の北潟屋彌左衛門方に一年未滿、金澤の町年寄喜多村彦右衛門方に約二年、それから松任の町の素封家相河屋武右衛門方に約一年あまりの間使として居つたのであるが、三軒共揃ひも揃つて俳句に興味を持てる家庭であつた。北潟屋の主人は岸大眠と名乗る若推門下の俳人であり、喜多村彦右衛門は號を雪翁と云つて深く俳諧に心を寄せて居る人であり、相河屋は若主人の久兵衛は

支考の門人で桃洞舎之甫と號し、その妻のする女も紫仙と呼んで俳句に熱心なる人々であつた。その頃金澤に伊勢派の中川乙由の門人で、近郷に名高い堀田麥水といふ宗匠が居つたが、この相河屋の若主人夫妻は、彼女を麥水の許に入門せしめて、仕事の閑を見付けては勉強さしてくれた由である。

## 3 其の後の進境

十五歳の享保元年の夏頃は、彼女は家庭に居つて働いて居つたか、芭蕉十哲の一人である各務支考の高弟蘆元坊が、諸國行脚の途次松任の高田屋に滞在の際、彼女は元をその宿に訪ね、志を述べて教へを請うた。元はたびの疲れですでに蚊帳の中にあつたが、試みに「時鳥」の題で即吟せしめた。千代女苦作を示すと「成つて居らん」と捨て顧みず。之を繰返す中に元は眠に入りしも、千代女はなほ蚊帳の外にあつて沈吟遂に曉に及んだ。元目を覺まして、千代女の尙ほ居るのに驚き「夜が明けましたか」と問ふと、彼女は「時鳥ほととぎすと

て明けにけり」の一句を得て之を元に示した處「是あるかな」と嘆賞して入門を許した。

十七歳の時には、各務支考が北國行脚の途次、千代女の許に宿つて、彼女の「行春の尾をそのままにかきつばた」「稻妻の裾をぬらすや水の上」の二句を推賞して、友人に送信した事がある。その書信の一端には、彼女を美婦とも言つて居る。十九歳の四月、金澤藩の足輕福田彌八に嫁して一子彌市を擧げたが、二十六歳の時夫に死別し、二十七歳にてタツタ一人の愛兒を失ひて、此の人生の二大悲惨事を體驗したる彼女は、佛の信仰に生きむとして、享保十三年十二月二十七日の若さで同じ松任町の聖興寺の柳松院師を導師として剃髮出家の身となつた。

出家後の千代尼は、素園と號して一笠一枝の俳諧行脚を試み、三十一歳の享保十七年の秋には、もとの主家相河屋の妻女すゑ女と近畿に遊び、三十六歳の

元文三年の秋には金澤の珈涼尼と上洛し、更に五十三歳の寶曆四年の夏には、彼女一生の大旅行たる永い行脚に出で、先づ京都に出でそれから近畿、關東、奥州を巡り、芭蕉翁の「奥の細道」の昔を偲びながら、越後路を経て寶曆六年に歸郷して居る。この大旅行を終つて歸郷後七年目、彼女六十二歳の寶曆十三年には、俳人無外庵の手によつて「千代尼句集」が出来上つた。

明和八年七十歳の時には、雲樵既白によつて、千代尼句集の後篇とも云ふ可き「俳諧松の聲」が成つたが、この兩三年來健康兎角勝れず、七十三歳の三月には病中にて請はるゝまゝに蕪村の「玉藻集」の序文を草したが、翌安永四年九月八日七十四歳を以て一月も見てわれは此世をかしくかな」の一句を辭世として眠るが如く大往生を遂げた。後二十五年忌辰には、松任聖興寺境内に建碑、三十七年忌辰には金澤念西院に句碑が建てられ、今日も毎年九月八日には松任の聖興寺で千代尼追憶の雅會が開かれる。

#### 4 芭蕉と千代女

桃青松尾芭蕉をして、天下の俳聖たらしめたのは、彼の大天才によるは勿論であるが、よくその天才を伸展發揚を得たのは、第一に江戸時代文藝隆昌の際に生を享けた事である。第二に蟬吟良忠に仕へ、季吟の加筆をうけて少年時代からの句作をスタートとすべきである。第三に主君良忠の天死によつて、遁世伊賀を出で江戸に下つた事である。第四に門人鯉屋杉風等後援によつて、悠々自適の生活安定を得たことである。第五に旅を好んで四方に遊歴し、自ら吟腸を肥し得た事である。

千代女をして徳川時代の女流俳人たらしめたのも、芭蕉の夫れとよく似て居る所がある。第一に等しく文運隆昌の元祿時代に生れた。第二に大眠、雪翁、之甫夫妻などの家庭に入つて、幼少よりの句作がスタートであつた。第三にその愛夫、愛兒の死去によつて、世の無常を感じ出家した事である。第四に窮

迫せざる家庭にて、働きつゝ生活の安定を得て居つた事である。終りにやはり旅を好んで四方に遊歴し、自ら吟腸を肥し得た事である。亭々として天を摩する大木も、その種苗がよく己が素質を伸し得る環境に置かれる事によつて、その大を爲すのである。千代女の環境も、その大を成し得たる點より考へ來れば誠に恵まれたるものと謂つ可きであらふ。

#### 三、蕉翁の風韻に通ふ彼女の名句

千代女の句として傳へらるゝものは、一千數百の多數に上るが、其の後新しき文献の發見により、他人の句が紛れ込みしと確認さるゝに至つたものも少なくない。彼の夫に死別したる時の作として傳へらるゝ「起きて見つ寝て見つ蚊帳の廣さかな」は遊女浮橋の句。「蓮の實にはちかれてたつ蜻蛉かな」は、大和の千代女の句。「明ぬ戸に心かよふや時鳥」は、すゑ女の句。「船待の笠にためたる落

葉かな」は、文章の句。「蝶々や花盗人をつけてゆく」は也有の句の如きは、その一例である。彼のほととぎすほととぎすとして明けにけりの句も、伊勢の涼菟又は調和の「時鳥々々として寝入りけり」の模作なりなどいふものもあるが、是は暗合であつたのであらう。

彼の「澁かろと思へど柿の初ちぎり」は、金澤の藩士福田彌八より求婚の際の謙讓の心持の表現と傳へられて居り、有名なる「朝顔やつるべとられて貰ひ水」は、婚嫁後世話女房時代の作であらふ。彼の「破る子のなくて障子の寒さかな」、「蜻蛉つりけふはどこまで行つやら」は、愛兒彌市を失ひし時の母性愛の發露である。「ひとかゝへあるも柳は柳かな」は、旅して京に入りし時、千代女を迎へる俳筵で、彼女の偉大なる體格を「炎天に火を吹きさうな鬼瓦」と一俳人の揶揄したのに對する應酬である。此の外或は「戸のあいて居れど留守なり桃の花」「二つ三つ夜に入りさうな雲雀かな」「道々の花を一目や吉野山」「來

て見れば森には森の暑さかな」「釣竿の糸にさはるや夏の月」「月見にも陰ほしがるや女子達」「名月やどこまでのばす富士の裾」「初雁や聲あるものを見失ひ」「しなはねばならぬ浮世や竹の雪」「行としやつれだつものは何と何」「百生や蔓一すぢの心より」「延る程土に手をつく柳かな」「朝顔や地に咲くことをあぶながり」の句の如きは永く世の噴々稱する所である。後年小泉八雲のヲフカデイオ・ヘルンが其の自著の中に「蜻蛉つり」の句を英譯して稱揚し、彼女の追悼句會には、花本聽秋は「とられたる釣瓶昔の月をくむ」野田大槐は「朝顔の其の句世を覆ふあなかしこ」内藤鳴雪は「甦る魂や昔のほととぎす」徳富蘆花は「炎天や河はあれども千代の水」などの句を寄せてその遺韻を偲び、畏くも千代尼句集は、大正五年八月十三日には朝香宮殿下、同年十一月三十日には東宮殿下、大正八年七月十日には、東久邇宮殿下の御台覽の光榮に浴し、皇恩枯骨に及んだ趣に承る。